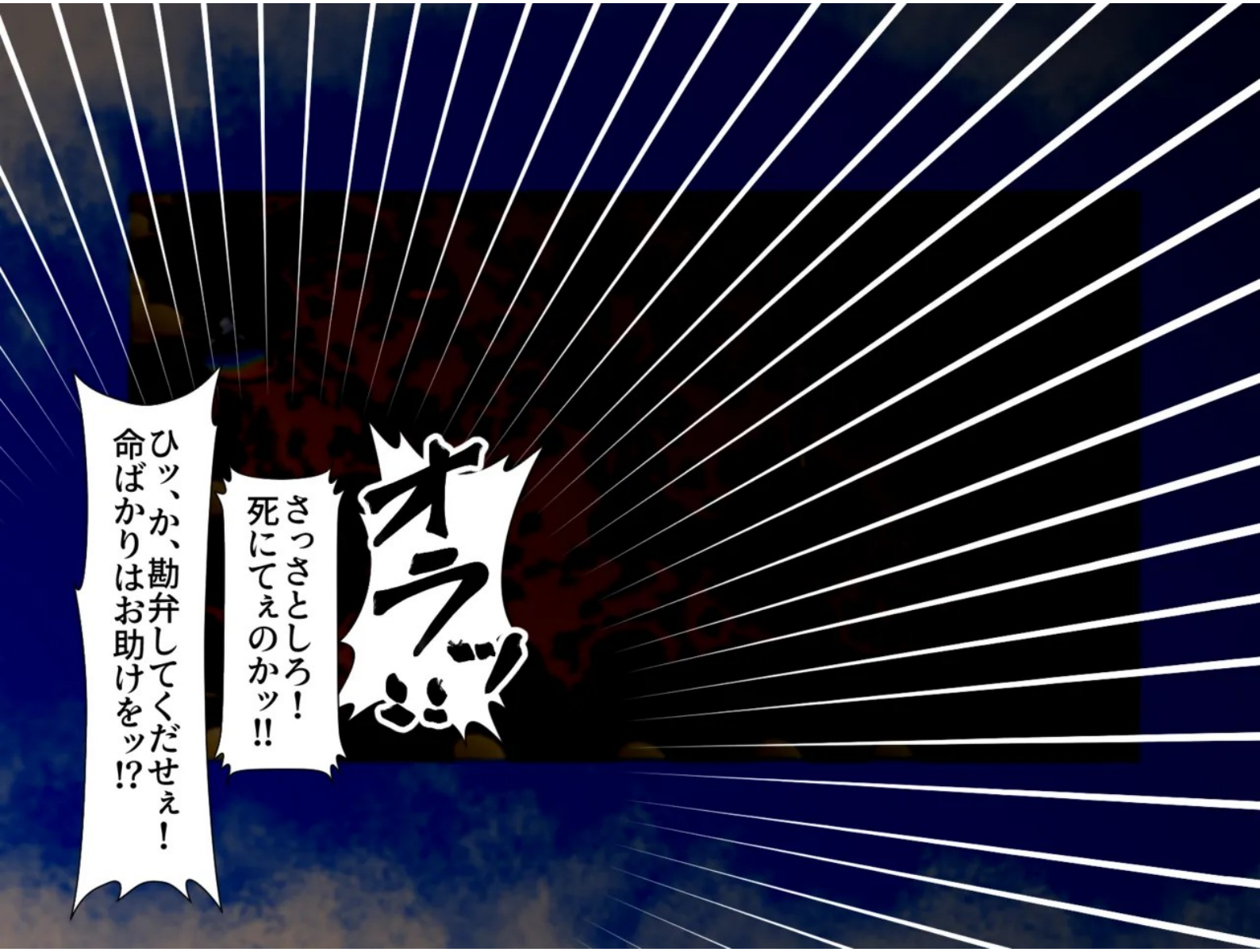
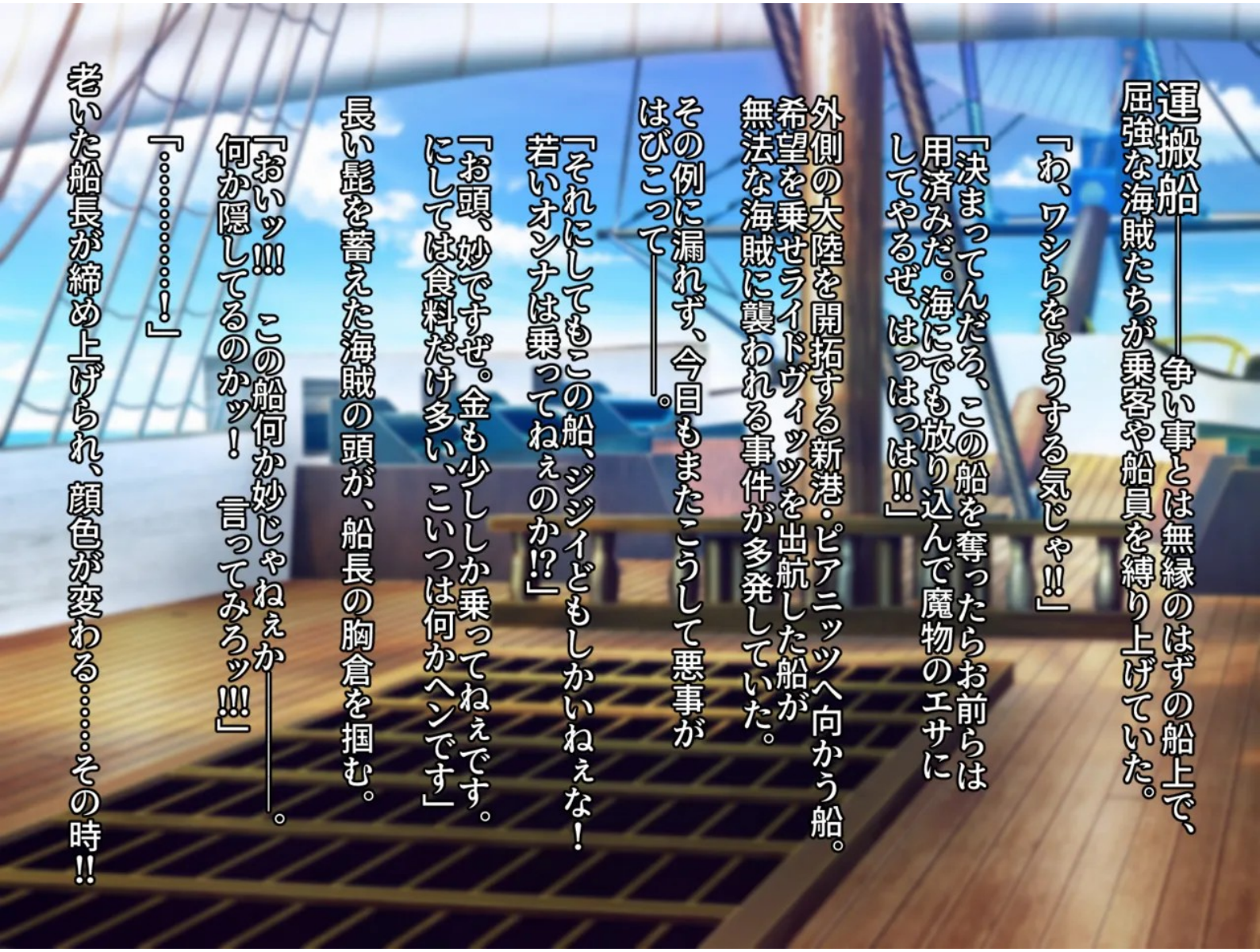
ヒプナダンジョン
-催眠迷宮-
全編フルカラー
本編110P以上
基本絵12枚

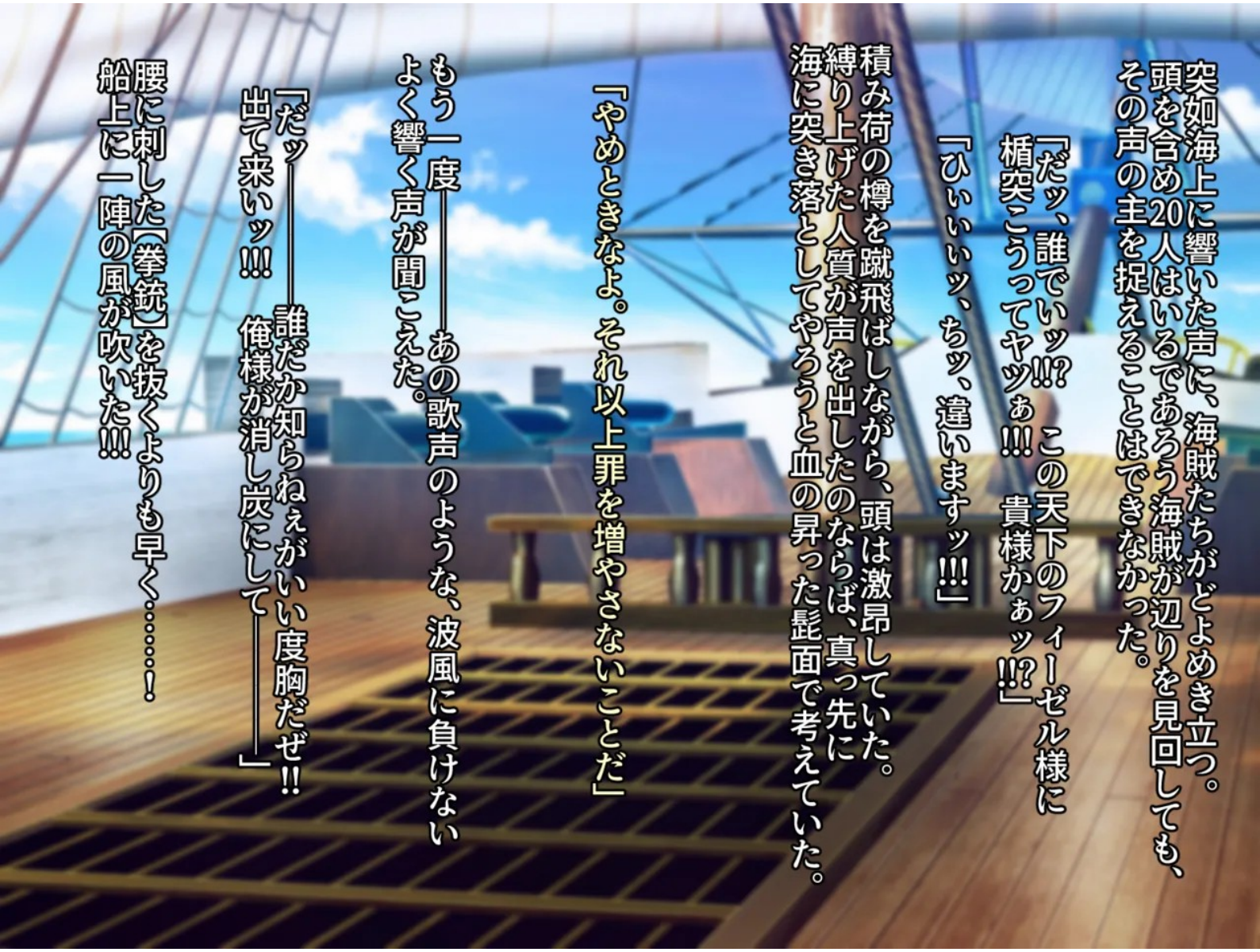
神無き世界、ロイアーナ――
創造神の手を離れ、独自の発展を遂げる
未来を選択した世界があった。
人々は争いもしつつ、しかし主体性も学び、
多くの野望、希望、欲望を育み、明日を夢見る。
特に巷を騒がせているのは、海の向こうにある
黄金郷――金銀財宝に溢れた儲け話だ。
港町は活気に湧き、今日もまた何隻もの船が
夢を乗せ海原へ旅立って行く……。
海の果てにあるのは、希望か、それとも……？
祈る神もいない世界で、ヒトは何を見るのか……。

Prologue
出会い
-Encounter-


オラッ
さっさとしろ！
死にてぇのかッ!!
ひッ、か、勘弁してくだせぇ！
命ばかりはお助けをッ!?

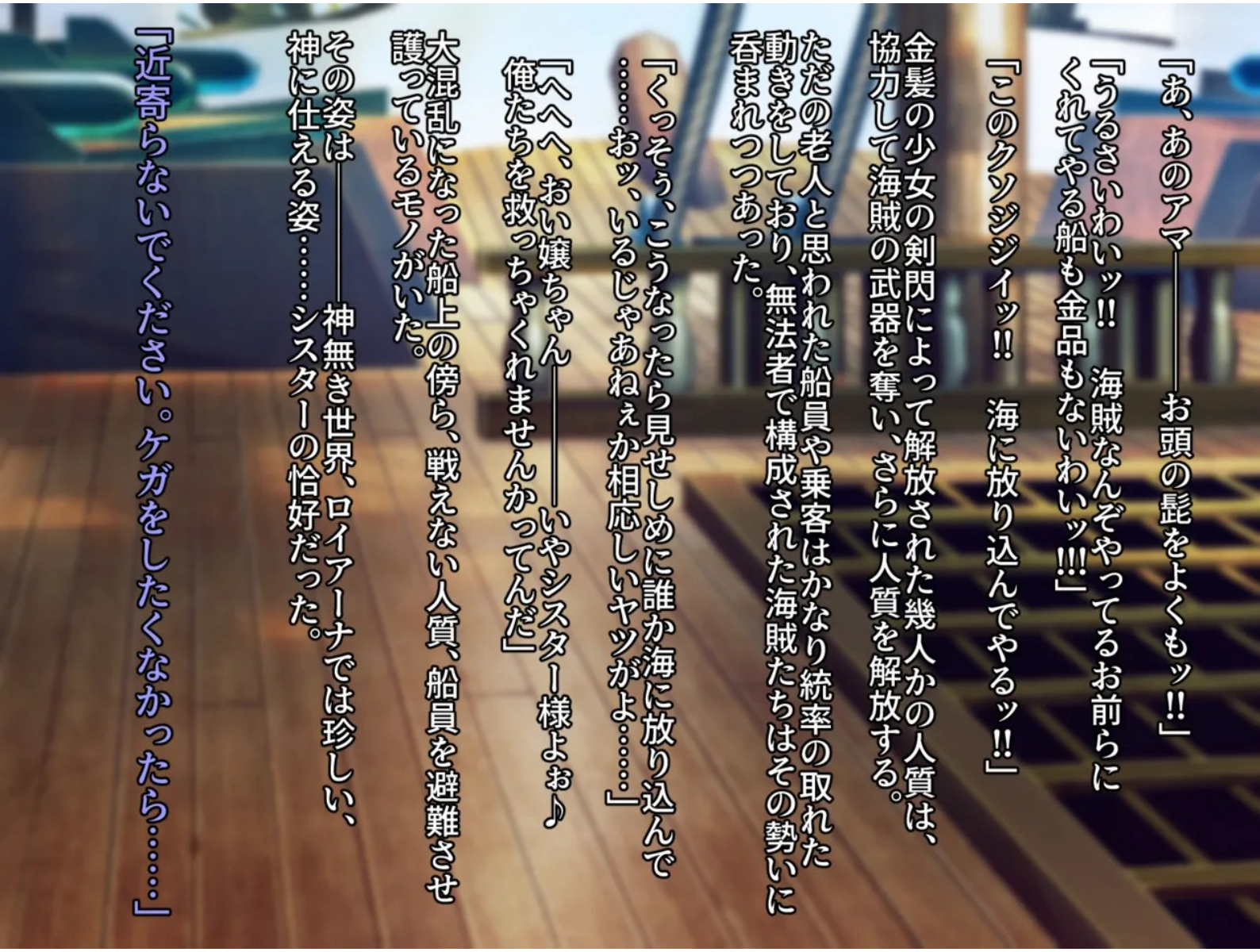

運搬船――争い事とは無縁のはずの船上で、
屈強な海賊たちが乗客や船員を縛り上げていた。
「わ、ワシらをどうする気じゃ!!」
「決まってんだろ、この船を奪ったらお前らは
用済みだ。海にでも放り込んで魔物のエサに
してやるぜ、はっはっは!!」
外側の大陸を開拓する新港・ピアニッツへ向かう船。
希望を乗せライドヴィッツを出航した船が
無法な海賊に襲われる事件が多発していた。
その例に漏れず、今日もまたこうして悪事が
はびこって――。
「それにしてもこの船、ジジイどもしかいねぇな！
若いオンナは乗ってねぇのか!?」
「お頭、妙ですぜ。金も少ししか乗ってねぇです。
にしては食料だけ多い、こいつは何かヘンです」
長い髭を蓄えた海賊の頭が、船長の胸倉を掴む。
「おいッ!!!　この船何か妙じゃねぇか――。
何か隠してるのかッ！　言ってみろッ!!!」
「……！」
老いた船長が締め上げられ、顔色が変わる……その時!!

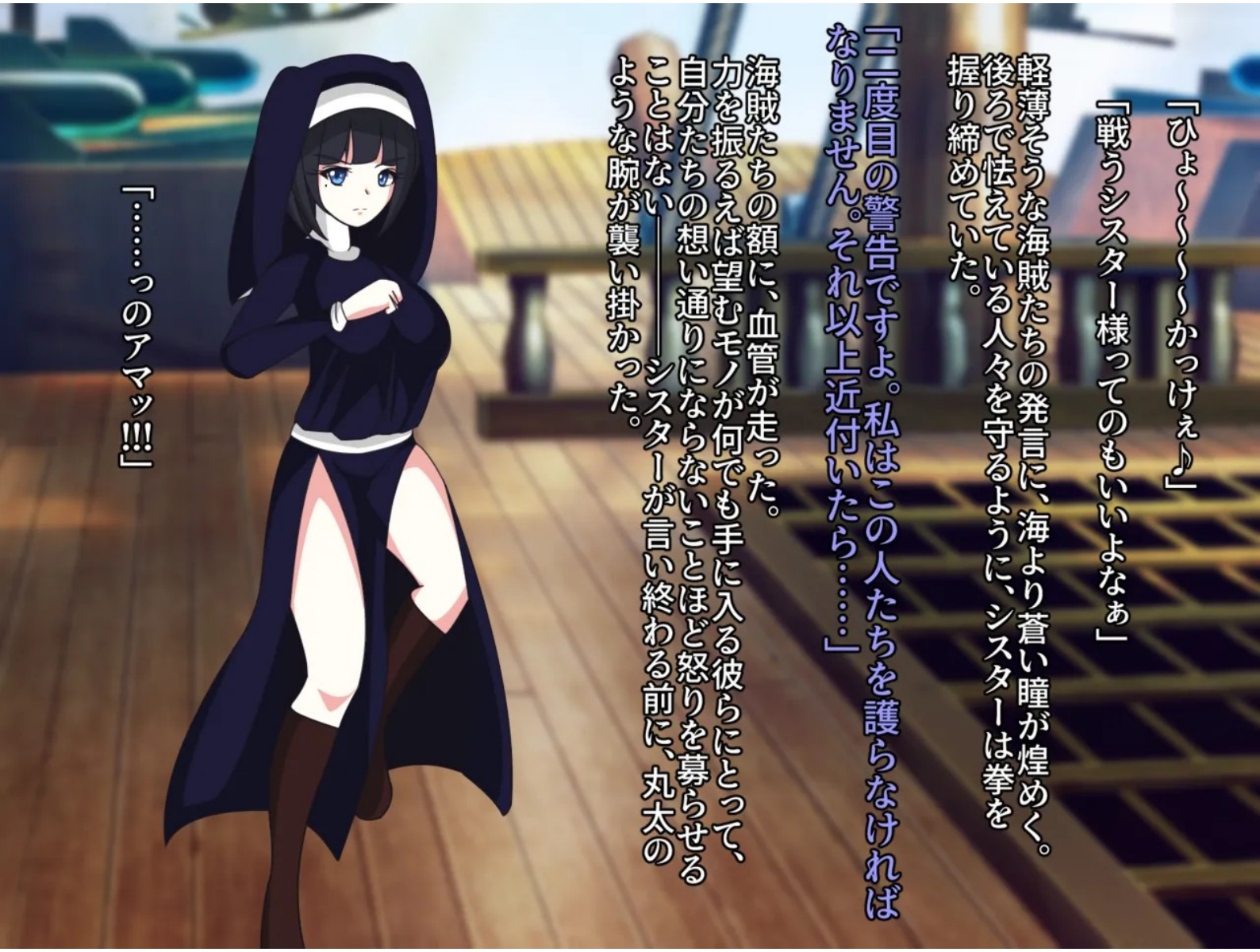
この海域を荒らすフィーゼル海賊団……
その悪事、確かに見届けた！


突如海上に響いた声に、海賊たちがどよめき立つ。
頭を含め20人はいるであろう海賊が辺りを見回しても、
その声の主を捉えることはできなかった。
「だッ、誰でいッ!?　この天下のフィーゼル様に
楯突こうってヤツぁ!!!　貴様かぁッ!!?」
「ひぃいいッ、ちッ、違いますッ!!!」
積み荷の樽を蹴飛ばしながら、頭は激昂していた。
縛り上げた人質が声を出したのならば、真っ先に
海に突き落としてやろうと血の昇った髭面で考えていた。
「やめときなよ。それ以上罪を増やさないことだ」
もう一度――あの歌声のような、波風に負けない
よく響く声が聞こえた。
「だッ――誰だか知らねぇがいい度胸だぜ!!
出て来いッ!!!　俺様が消し炭にして――」
腰に刺した【拳銃】を抜くよりも早く……！
船上に一陣の風が吹いた!!!

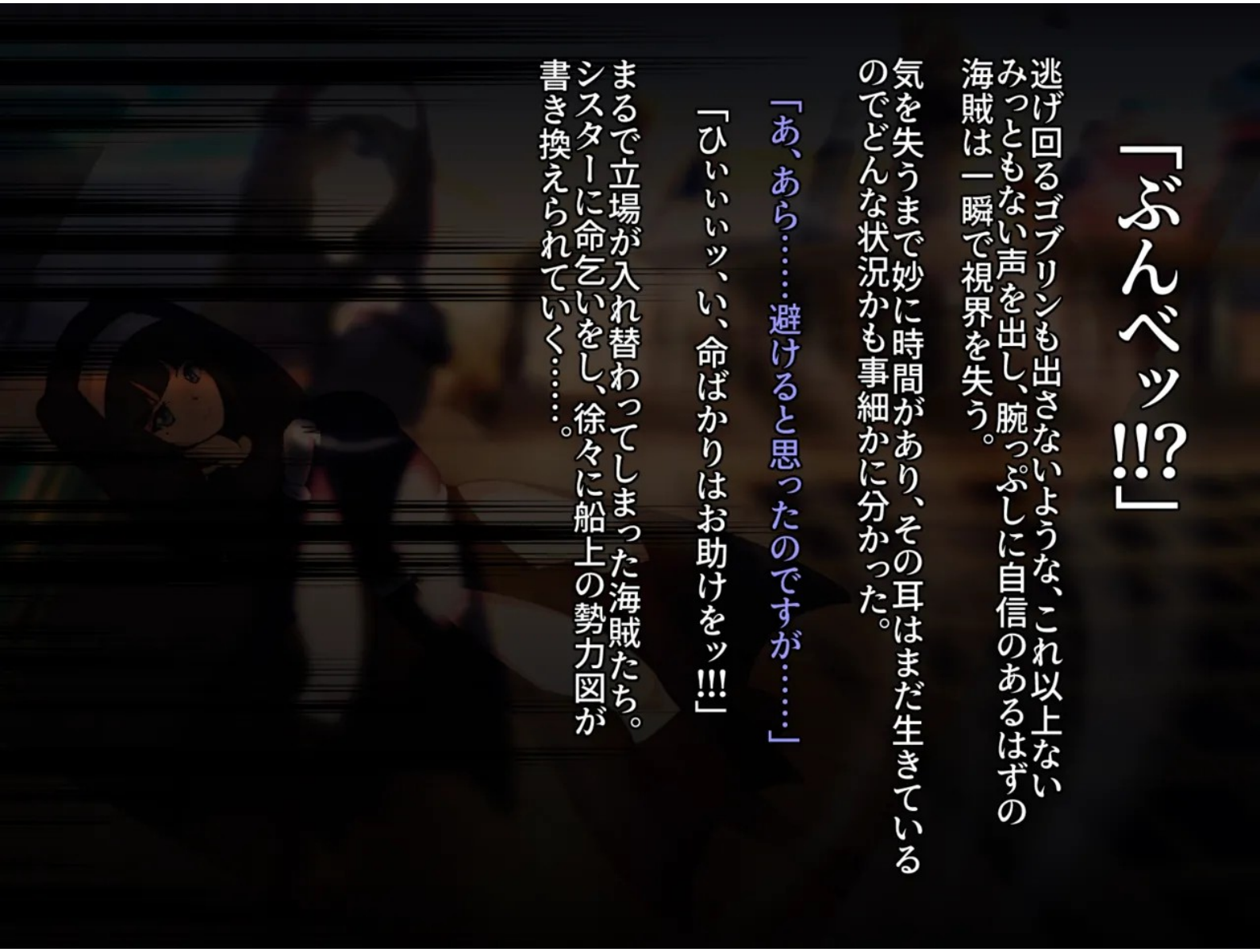
「たぁッ!!」
「なッ!!?」

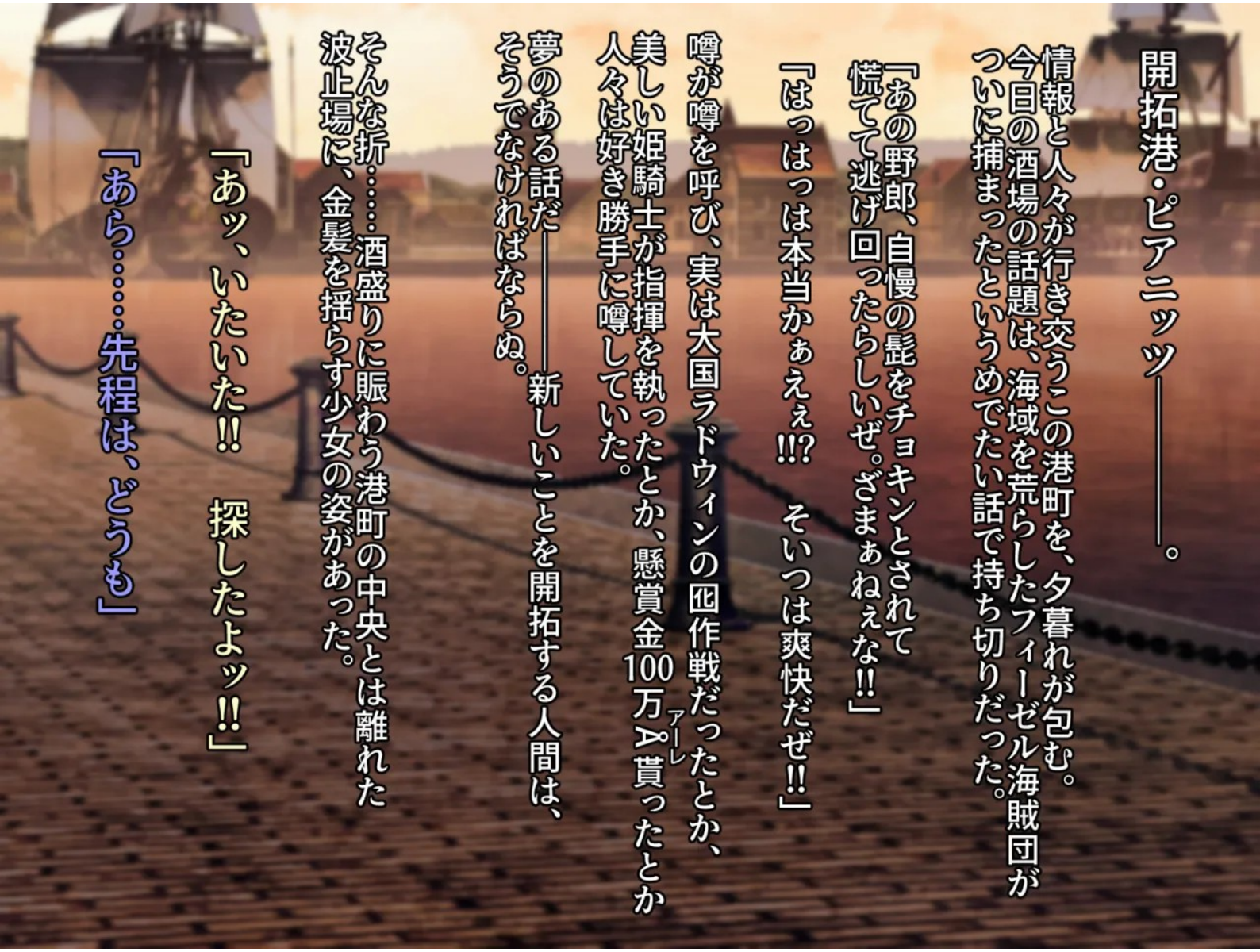
頭が手元に集中した隙を突き、
マストから飛び降りて来た少女。
一瞬の閃き――冴え渡る剣技が
頭自慢の髭を断ち、海賊たちも
呆気に取られる。
「おッ、俺の髭が……!!」
「今だッ!!　全員かかれッ!!」
「おうさ!!」
「元騎士団の維持、見せてやるッ!!」

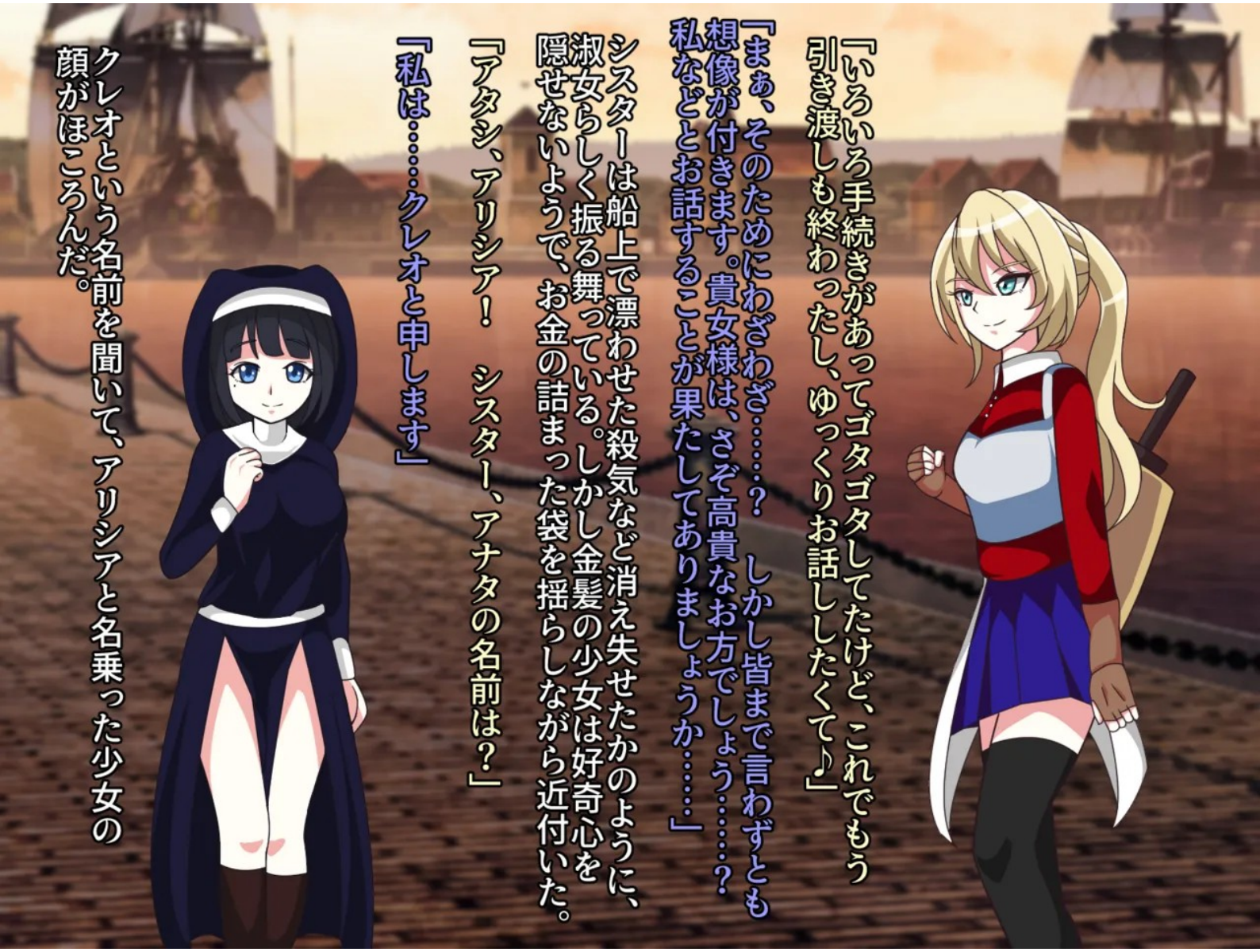

「あ、あのアマ――――お頭の髭をよくもッ!!」
「うるさいわいッ!!　海賊なんぞやってるお前らにくれてやる船も金品もないわいッ!!!」
「このクソジジイッ!!　海に放り込んでやるッ!!」
金髪の少女の剣閃によって解放された幾人かの人質は、協力して海賊の武器を奪い、さらに人質を解放する。
ただの老人と思われた船員や乗客はかなり統率の取れた動きをしており、無法者で構成された海賊たちはその勢いに呑まれつつあった。
「くっそぅ、こうなったら見せしめに誰か海に放り込んで……おッ、いるじゃあねぇか相応しいヤツがよ……」
「へへへ、おい嬢ちゃん――――いやシスター様よぉ♪俺たちを救っちゃくれませんかってんだ」
大混乱になった船上の傍ら、戦えない人質、船員を避難させ護っているモノがいた。
その姿は――――神無き世界、ロイアーナでは珍しい、神に仕える姿……シスターの恰好だった。
「近寄らないでください。ケガをしたくなかったら……」


「ひょ～～～～かっけぇ♪」
「戦うシスター様ってのもいいよなぁ」
軽薄そうな海賊たちの発言に、海より蒼い瞳が煌めく。
後ろで怯えている人々を守るように、シスターは拳を握り締めていた。
「二度目の警告ですよ。私はこの人たちを護らなければなりません。それ以上近付いたら……」
海賊たちの額に、血管が走った。
力を振るえば望むモノが何でも手に入る彼らにとって、自分たちの想い通りにならないことほど怒りを募らせることはない――シスターが言い終わる前に、丸太のような腕が襲い掛かった。
「……っのアマッ!!!」

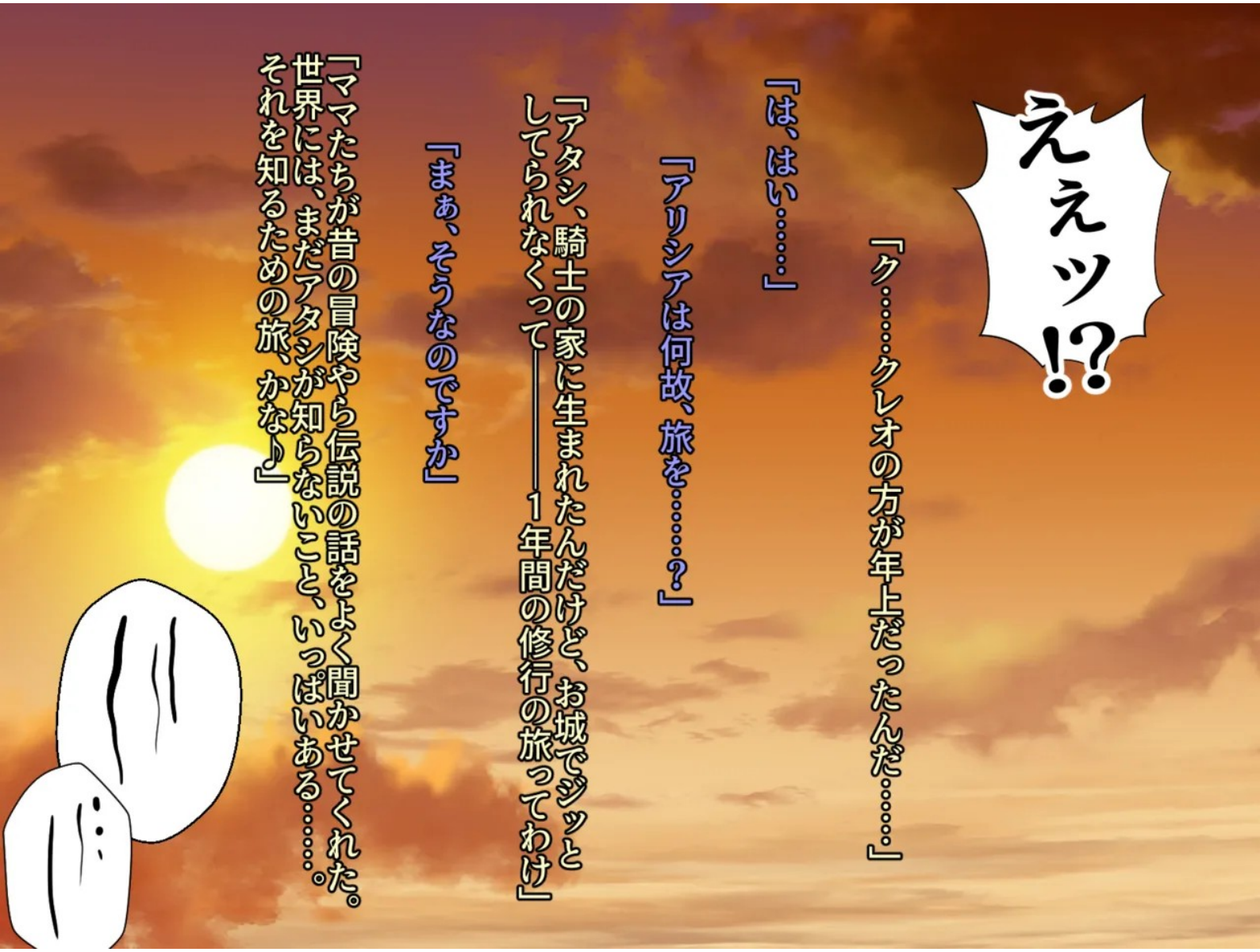
ズッ!!
「シッ!!!」


「ぶんべッ!!?」
逃げ回るゴブリンも出さないような、これ以上ないみっともない声を出し、腕っぷしに自信のあるはずの海賊は一瞬で視界を失う。
気を失うまで妙に時間があり、その耳はまだ生きているのでどんな状況かも事細かに分かった。
「あ、あら……避けると思ったのですが……」
「ひぃぃぃッ、い、命ばかりはお助けをッ!!!」
まるで立場が入れ替わってしまった海賊たち。
シスターに命乞いをし、徐々に船上の勢力図が書き換えられていく……。


開拓港・ピアニッツ――。
情報と人々が行き交うこの港町を、夕暮れが包む。
今日の酒場の話題は、海域を荒らしたフィーゼル海賊団がついに捕まったというめでたい話で持ち切りだった。
「あの野郎、自慢の髭をチョキンとされて慌てて逃げ回ったらしいぜ。ざまぁねぇな!!」
「はっはっは本当かぁえぇ!?　そいつは爽快だぜ!!」
噂が噂を呼び、実は大国ラドウィンの囮作戦だったとか、美しい姫騎士が指揮を執ったとか、懸賞金100万A（アーレ）貰ったとか人々は好き勝手に噂していた。
夢のある話だ――新しいことを開拓する人間は、そうでなければならぬ。
そんな折……酒盛りに賑わう港町の中央とは離れた波止場に、金髪を揺らす少女の姿があった。
「あッ、いたいた!!　探したよッ!!」
「あら……先程は、どうも」


「いろいろ手続きがあってゴタゴタしてたけど、これでもう引き渡しも終わったし、ゆっくりお話ししたくて♪」
「まぁ、そのためにわざわざ……？　しかし皆まで言わずとも想像が付きます。貴女様は、さぞ高貴なお方でしょう……？私などとお話することが果たしてありましょうか……」
シスターは船上で漂わせた殺気など消え失せたかのように、淑女らしく振る舞っている。しかし金髪の少女は好奇心を隠せないようで、お金の詰まった袋を揺らしながら近付いた。
「アタシ、アリシア！　シスター、アナタの名前は？」
「私は……クレオと申します」
クレオという名前を聞いて、アリシアと名乗った少女の顔がほころんだ。

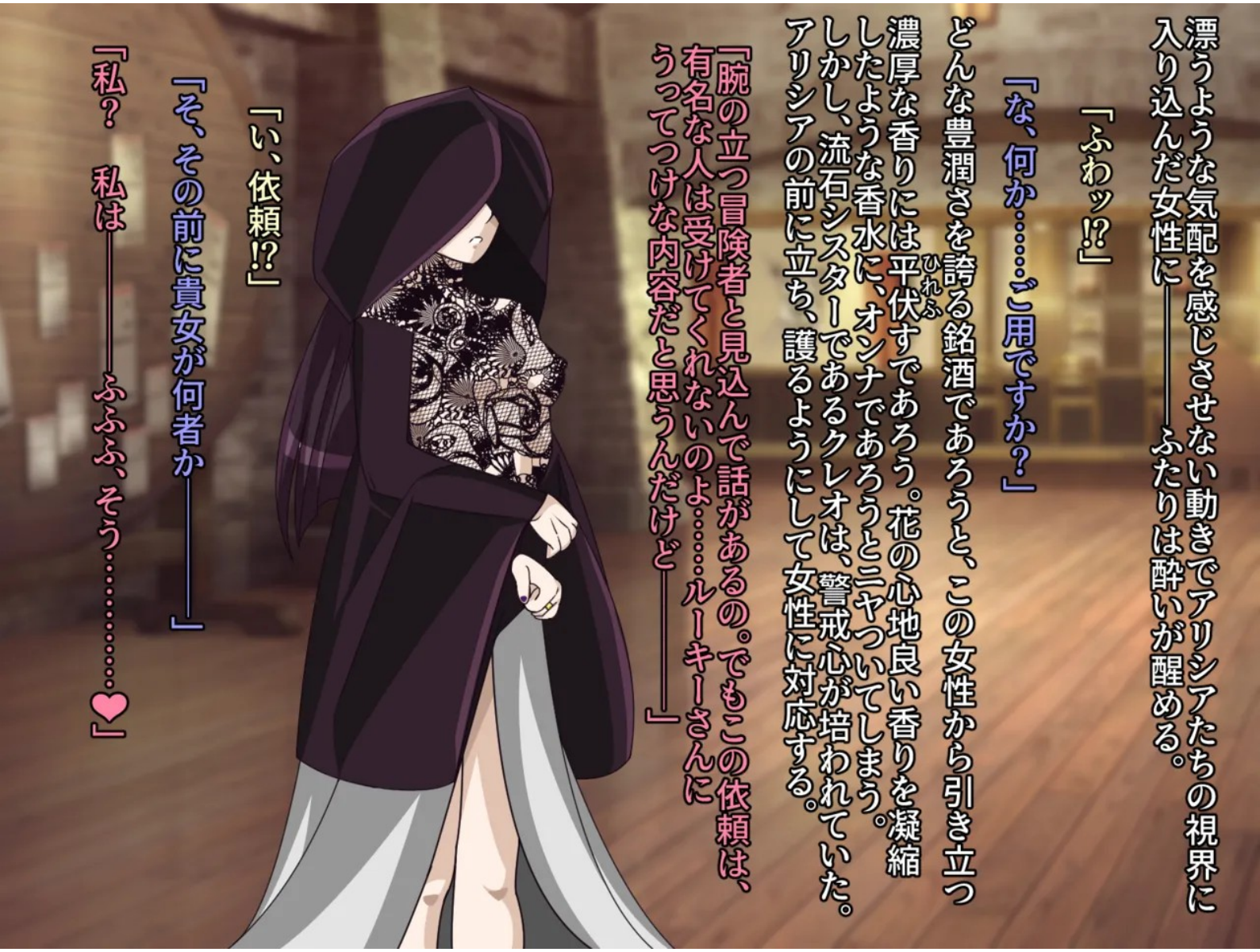
「クレオ……クレオっていうんだね！　ねぇクレオ、アタシと一緒に冒険しない？」
「えぇっ……し、しかし私はシスターの身であります故、アリシア様の邪魔になってしまっては……」
「邪魔だなんてとんでもない！　船の上で見せたあの強さ、それにシスターの魔法があれば、アタシも助かるんだけどな」
クレオの戦い方を見て、アリシアはその強さに惹かれたようだ。行先も決まっていない旅路なら、その同行者は多い方がいい。クレオもまた、微笑んでいた。
「わ、分かりました――アリシア様。お供致します」
「決まりだね♪　一緒に旅するんだし、アリシアでいいよ！」
「は――はいッ！　アリシア!!」


ええッ!?
「ク……クレオの方が年上だったんだ……」
「は、はい……」
「アリシアは何故、旅を……？」
「アタシ、騎士の家に生まれたんだけど、お城でジッとしてられなくって――1年間の修行の旅ってわけ」
「まぁ、そうなのですか」
「ママたちが昔の冒険やら伝説の話をよく聞かせてくれた。世界には、まだアタシが知らないこと、いっぱいある……。それを知るための旅、かな♪」

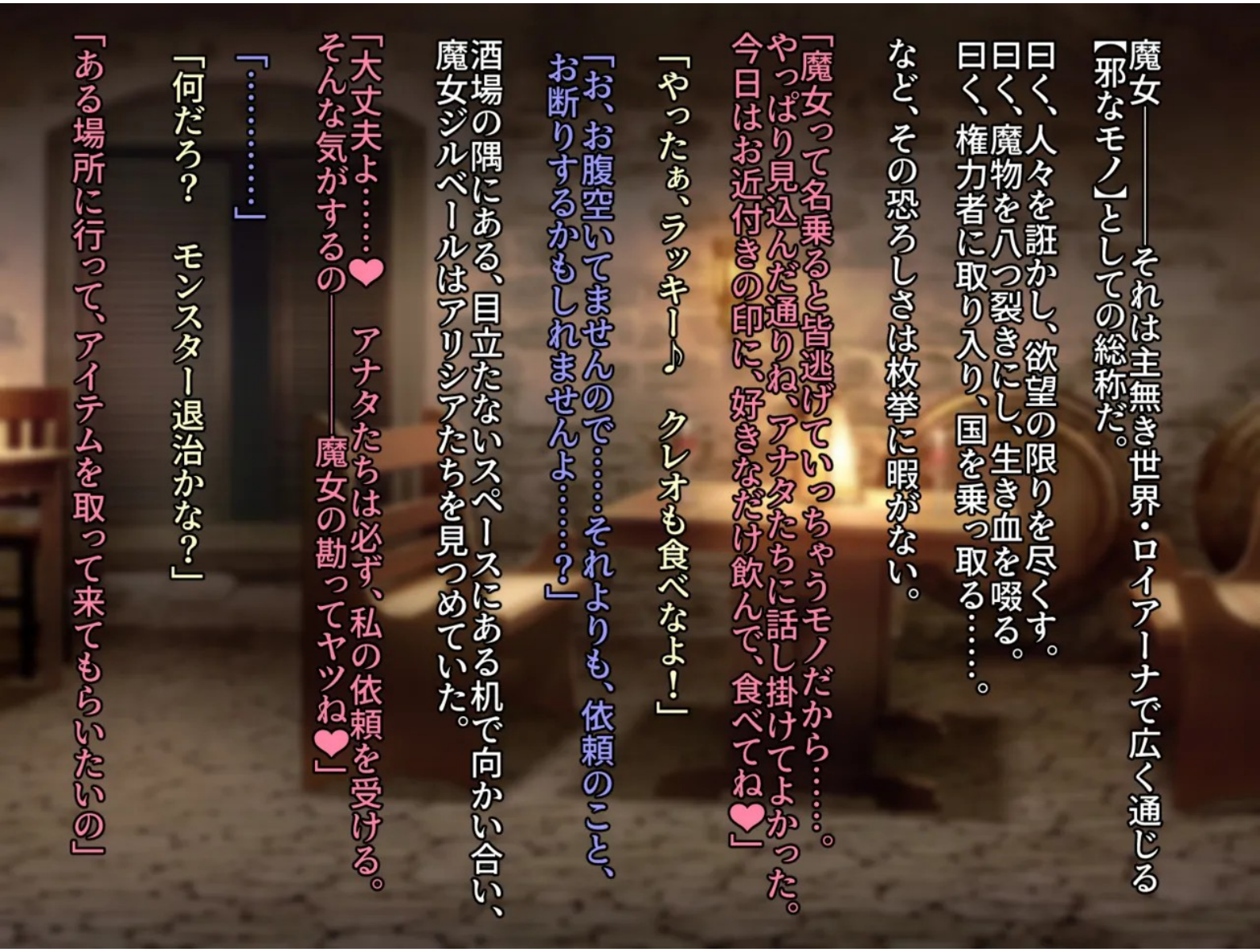
開拓港ピアニッツを発ち、2日目の午後。
アリシアとクレオはすっかり仲良くなり、打ち解けていた。
剣を扱う前衛のアリシアと、後衛で支援するクレオ。
道中のモンスターもすべて蹴散らし、やがて辿り着く。
「ここがマイルベルの街かぁ……」
「大きな街ですね……迷ってしまいそうです」
一攫千金、または新天地を求め多くの冒険者が行き交う
交易街マイルベル。ここならアリシアが望むような、
未知への冒険へ誘う魅力的な情報がありそうだ。
「情報収集は酒場が鉄則だね！
日が暮れたら酒場に行ってみよう」
「あ、あの……私、シスターですので……お酒は……」
「あッ、そうか――まぁ、飲めるモノを……」
「ワインしか飲めないんですけど、置いてますかね……？」
（……飲むんだ……）

夜、マイルベルの冒険酒場――。

「あッ、見て!!
この前の髭!!」
「こ、声が大きいですよ……」
お酒が入りすっかり気分が良くなったアリシアは、
賞金首が並んでいる掲示板を見て笑っていた。
「いや～～～こんなに人相が悪いヤツだったけど、自慢の
髭を切られちゃった時の慌てふためいた顔ときたら!!」
自分だけの手柄ではないが、アリシアが旅の中で初めて得た
勝利の快感、余韻は自信を付けさせた。
「それにしても、スゴい額の賞金ですね……ドラゴンの親玉、
盗賊団のリーダー……あ、悪魔までいますよ……」
「アナタたち――駆け出しの冒険者かしら?」


漂うような気配を感じさせない動きでアリシアたちの視界に入り込んだ女性に――ふたりは酔いが醒める。
「ふわッ!?」
「な、何か……ご用ですか？」
どんな豊潤さを誇る銘酒であろうと、この女性から引き立つ濃厚な香りには平伏すであろう。花の心地良い香りを凝縮したような香水に、オンナであろうとニヤついてしまう。しかし、流石シスターであるクレオは、警戒心が培われていた。アリシアの前に立ち、護るようにして女性に対応する。
「腕の立つ冒険者と見込んで話があるの。でもこの依頼は、有名な人は受けてくれないのよ……ルーキーさんにうってつけな内容だと思うんだけど――」
「い、依頼!?」
「そ、その前に貴女が何者か――」
「私？　私は――ふふふ、そう……❤」

「私は【魔女】――魔女ジルベール……」


魔女――それは主無き世界・ロイアーナで広く通じる【邪なモノ】としての総称だ。
曰く、人々を誑かし、欲望の限りを尽くす。
曰く、魔物を八つ裂きにし、生き血を啜る。
曰く、権力者に取り入り、国を乗っ取る……。
など、その恐ろしさは枚挙に暇がない。
「魔女って名乗ると皆逃げていっちゃうモノだから……。やっぱり見込んだ通りね、アナタたちに話し掛けてよかった。今日はお近付きの印に、好きなだけ飲んで、食べてね❤」
「やったぁ、ラッキー♪　クレオも食べなよ！」
「お、お腹空いてませんので……それよりも、依頼のこと、お断りするかもしれませんよ……？」
酒場の隅にある、目立たないスペースにある机で向かい合い、魔女ジルベールはアリシアたちを見つめていた。
「大丈夫よ……❤　アナタたちは必ず、私の依頼を受ける。そんな気がするの――魔女の勘ってヤツね❤」
「……」
「何だろ？　モンスター退治かな？」
「ある場所に行って、アイテムを取って来てもらいたいの」

「え？　それだけ？」
「それだけよ❤」
「……」
魔女ジルベールが入れないダンジョンがあり、その奥にあるブラッドサンドライトと呼ばれる宝石を手に入れ帰って来るだけ、という内容だった。もちろん、中にはモンスターもいるが、冒険初心者でも十分に対応できるうってつけの場所だという。
「報酬は望みのまま、受け渡しは無事に帰って来られたらね。ダンジョンの入り口で待っているから」
「よーし乗ったよその話！」
「ア、アリシア……そんな簡単に受けて大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫！
アタシとクレオなら平気だって!!」
「……」
「そ、そうですね……。
旅の資金も欲しいですし、
協力して取り掛かりましょう」
酒の勢いか、駆け出し特有の過剰な自信か――。
アリシアとクレオはこうして、魔女の依頼でダンジョンへと
向かうことになった。初めての冒険である。
「決まりね……さぁ、うんと英気を養ってちょうだい❤
力を付けないと目的の場所に付く前に倒れてしまうわよ❤」
「はーい、いっただっきまーす」
「い、頂きます……」
「ふふふ――……❤」

そして夜が明けた！
アリシアとクレオは
マイルベルから南西にある
洞窟の前に立つ！

アリシア
-駆け出し冒険者-

【Lv】 6　次のレベルまであと　182

【職業】 騎士見習い　　【状態】 なし

【能力】 HP　541/541　MP　43/43

力	35
魔力	14
防御	42
魔法防御	28
すばやさ	31
運	40

【スキル】

かばう	★味方がピンチの時に自動的にかばう
剣技Lv1	★剣を装備して戦うと攻撃力アップ
挑発Lv1	★敵から攻撃されやすくなる

「まだアタシの知らない世界がある！」

騎士の家系に生まれたお嬢様。正義感と才能に溢れ、どんなことにも好奇心を忘れない。無鉄砲さはどちらに似たかと親同士で議論になっているが、本人は母似だと思っている。

クレオ
-旅の修道女-

【Lv】 9　次のレベルまであと　377

【職業】 格闘シスター　【状態】 なし

【能力】 HP　647/647　MP　120/120

力	25
魔力	55
防御	21
魔法防御	46
すばやさ	28
運	12

【スキル】

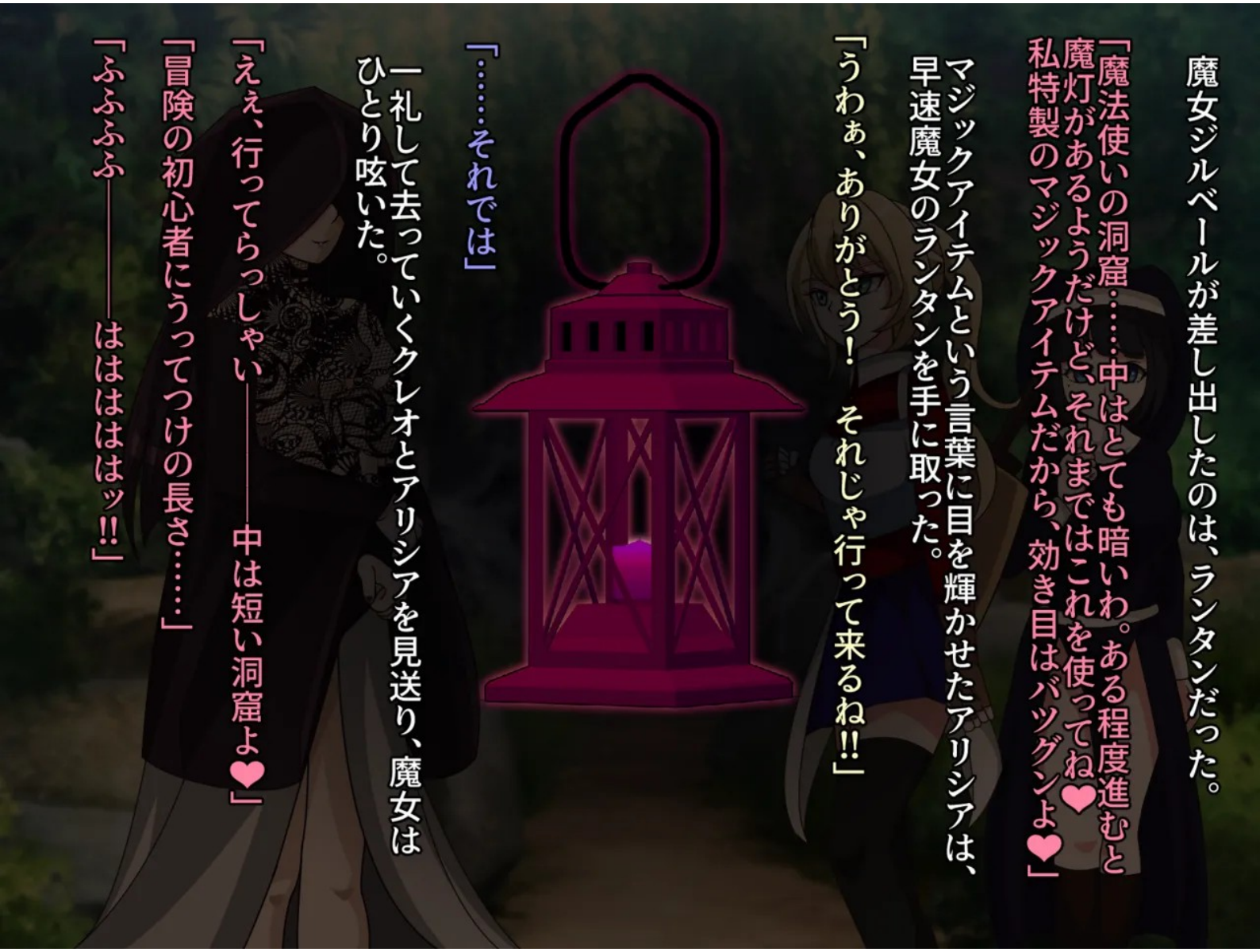
回復波及　★回復した効果が自らにも及ぶ
体術Lv1　★武器を装備していないと攻撃・回避＋
小柄　★敵から狙われにくくなる

「ロイアーナ教団、シスターのクレオです」

両親を病で亡くしたが、教団に保護され育てられた。やがて世界に恩返しをするため旅を始める。鍛えられた武術は弱きモノを救うために振るうと決めており、影に徹している。

Chapter 1
ヒュプノダンジョン
-Hypno Dungeon-

「よく来てくれたわ❤
ここがその洞窟よ」
「ここがダンジョン……!!
ワクワクするね!!」
「ここは
どんな洞窟
なのでしょうか？」
「私が調べた文献によると、高名な魔術師がひとりで管理し、
死ぬまで魔法の研究をしていた曰く付きの洞窟らしいわ」
死を知らぬアンデッド、凶暴なゴブリンなど、魔女は恐ろしい
名前を口にするが、アリシアは怖じ気づいた気配すらない。
「よし、行こう……！　クレオ、アタシに付いて来て!!」
「は、はい……お供します!!」
「それじゃあお願いね❤
あとこれは、私からの贈り物よ――きっと役に立つわ❤」


魔女ジルベールが差し出したのは、ランタンだった。
「魔法使いの洞窟……中はとても暗いわ。ある程度進むと魔灯があるようだけど、それまではこれを使ってね❤私特製のマジックアイテムだから、効き目はバツグンよ❤」
マジックアイテムという言葉に目を輝かせたアリシアは、早速魔女のランタンを手に取った。
「うわぁ、ありがとう！　それじゃ行って来るね!!」
「……それでは」
一礼して去っていくクレオとアリシアを見送り、魔女はひとり呟いた。
「えぇ、行ってらっしゃい――――中は短い洞窟よ❤」
「冒険の初心者にうってつけの長さ……」
「ふふふふ――――はははははッ!!」

ギアッ!!

魔女ジルベールは――その身体を一瞬にして消した。
人間を遥かに逸脱した動きは、それまで洞窟の前にいた痕跡をすべて消し、穏やかな静寂だけが辺りに戻る。
それまでいたアリシアも、クレオも、まるでその足跡すらない。
ただ、洞窟の中を進んでいる。
誰にも気付かれないまま――。
その洞窟は、熟練の冒険者でも攻略が難しいとされ、ギルドの特別許可がなければ入れないほど困難な道のりとされている。
帰還した生存者は
「美女に誘われるまま入った。入ってすぐ、同行者の様子がおかしくなって、ひとりは気が狂って魔物みたいになり、ひとりは笑いながら奥へ走って行った。怖くなった自分は必死で引き返したが、二度とあの場所へは行かない」
と語った……。
このダンジョンは今、【ヒュプノダンジョン】――。
催眠迷宮と呼ばれている……。

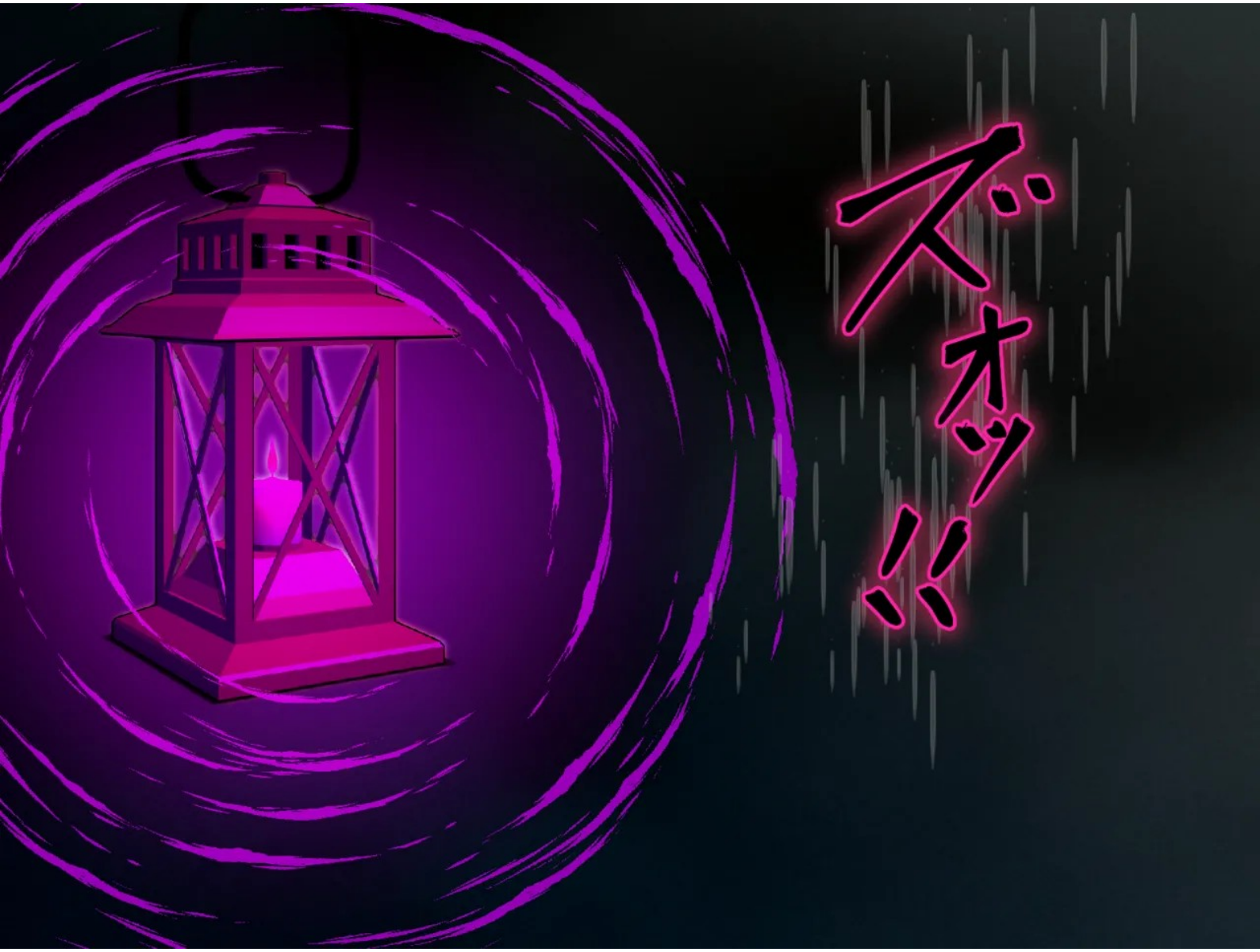
「ホントに暗くなったね……クレオ、大丈夫？」

「はぐ、アリシアがしっかり手を握ってくれているのだ……」

静かに歩いていたアリシアが、急に恥ずかしそうに慌てた。

「あああぁ、そうだッ!?　ランタン置いてたよね!!
あれ点けてみようッ!!」

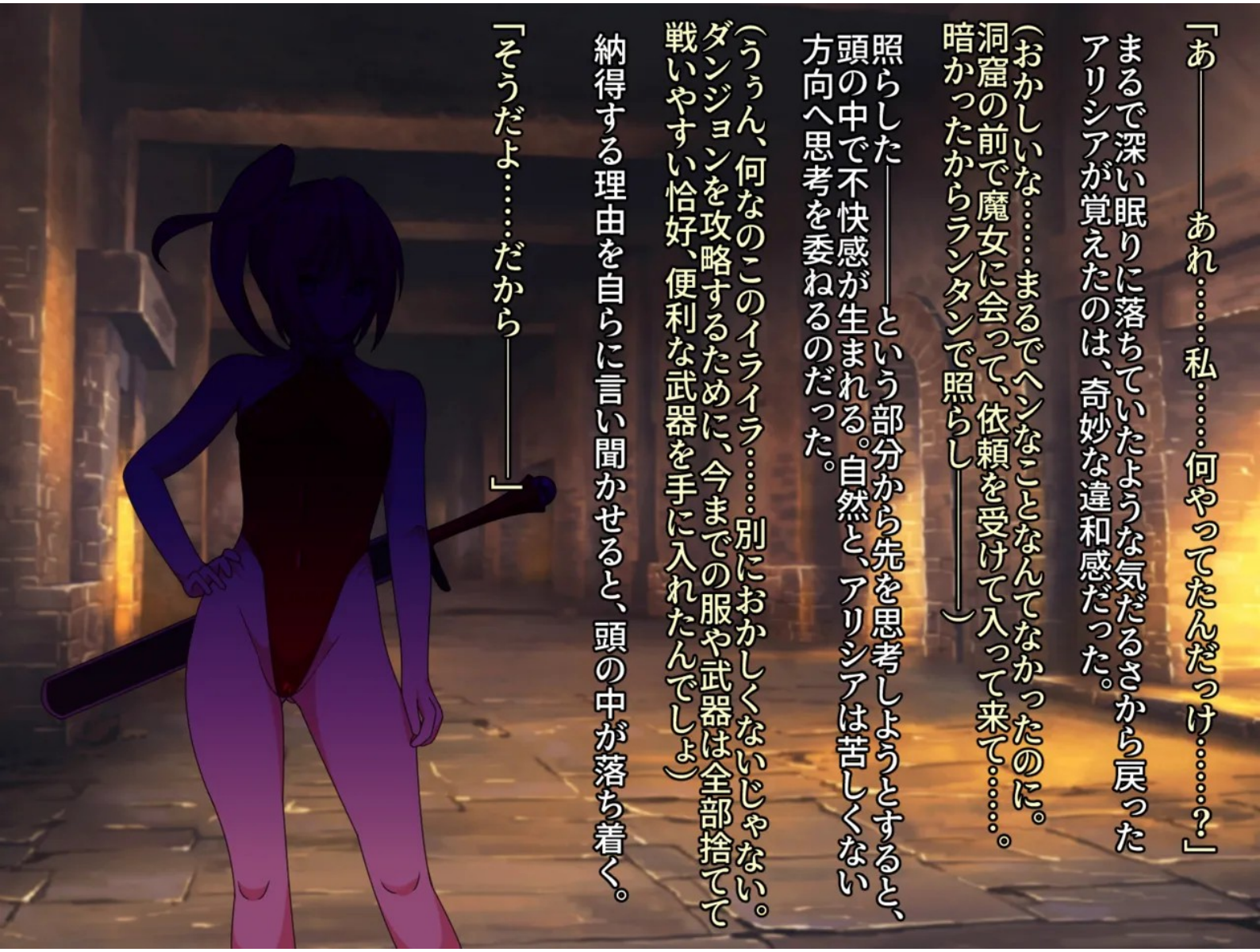
「そ、そのままでもいいですけど……♥」


ズオッ!!

「はぅッ……!?」
「え……な、何、これ……!?」

ランタンに火が灯った瞬間、
火が意志を持ったかのように
浮き上がり、奇妙な波動を打つ。
暗闇に浮かび上がった光に
アリシアもクレオも瞳を奪われ、
目が離せない内に力無く倒れてしまった。
「な、何で……力が……入らないよ……？」
「見てはいけない……危険な光……なのに……!!
目が離せない――……あぁ、綺麗な光……」
「もうアナタたちはこの迷宮の虜♥　うふふ……さぁ、
可愛い冒険者さんたち、相応しい姿で探索を始めましょうね」

「あぁ……ッ♥
頭の中に……何か……入って……♥
気持ちいい気分に――――♥」
「んぎぃッ♥　アタシの……中に……♥
しッ……知らないことが入って来るッ♥」
光の明滅と共に、駆け出しの冒険者であったふたりの脳内に
猛烈な勢いで邪な知識・意識が流れ込んで来る――――。
洞窟を冒険する知識、敵を蹴散らす技能、それを達成する
ための大きなレベルアップが、この数秒でもたらされたのだ。
「さぁ、強くなった状態でスタートよ……♥
せいぜい愉しませてね、アリシア、クレオ……♥
あーっはっはっは!!!」


「あ――あれ……私……何やってたんだっけ……？」
まるで深い眠りに落ちていたような気だるさから戻ったアリシアが覚えたのは、奇妙な違和感だった。
（おかしいな……まるでヘンなことなんてなかったのに。洞窟の前で魔女に会って、依頼を受けて入って来て……。暗かったからランタンで照らし――）
照らした――という部分から先を思考しようとすると、頭の中で不快感が生まれる。自然と、アリシアは苦しくない方向へ思考を委ねるのだった。
（うぅん、何なのこのイライラ……別におかしくないじゃない。ダンジョンを攻略するために、今までの服や武器は全部捨てて戦いやすい恰好、便利な武器を手に入れたんでしょ）
納得する理由を自らに言い聞かせると、頭の中が落ち着く。
「そうだよ……だから――」

「この衣装もヘンじゃないんだ……この先に進むために、必要なモノなんだから――――」
アリシアは腰に手を当て、自分の姿をまじまじと観察する。
魔力によって護られた薄い布は、心強い冒険の味方。
鉄の干渉を避けるためにプレートは外し、機能性を高めるために下半身には何も着けない。剣の柄には不気味な眼が光っているが、見ていると落ち着くし、魔力の昂ぶりを感じる。
「――――ん……？　何だろ……？」
何か大切なモノを失ったような気がする――――。
そう一瞬だけ思ったアリシアだったが、腰に提げた剣と自らの恰好を再認識すると、すぐにその思考を止めた。
「まぁいいや……それより、早く先に進まないと」
同じように洞窟へ入った、アリシアの相棒を探さなければ――――。
「アリシア！
もう、先に行ってしまうなんて!!」

魔灯が照らす、暗い洞窟の中でも輝く白い肌。
今は無き神の教えを護り、人々を救うべき立場にある
シスター・クレオの声であった。
「首輪を着けたら、着けたモノしか外せないようになっているんですから！　私はアリシア、アリシアは私。はぐれないように探索しないと!!」
「ごめんごめん……だって、ん……何だか、逃げなきゃ、いけない……？　みたいな感情が浮かんでさ――――」
歯切れの悪いアリシアに対して、クレオはハキハキしていた。
それはクレオがこれまで培ってきた【使命感】のような、与えられた状況を享受するという精神がもたらした状態だったのかもしれない――――催眠下にある、ということを少しも疑わない、操られたシスターの誕生だった。
「先に行ってしまわないよう、これからは私が前衛です」

「アリシアは後ろで警戒してください。挟み撃ちされたら危険ですから❤」
修道服では胸の大きさが目立つ、程度だったクレオの肉体。ダンジョンを進むに相応しい、際どい衣装になれば、その全身のメスの肉付きがより際立つ。アリシアの鮮やかな紅色とは異なる、肌色が浮かび上がるような白い生地。実際にピンク色の乳首が浮き上がり、動く度にムチムチと太ももと胸が揺れ、色気を振りまいている。
「いいの、クレオ？」
「えぇ、もちろんです❤　この旅のリーダーはアリシア、私はただの従者に過ぎませんわ❤　格闘には少々自信がありますし、ふたりで攻略すれば必ず突破できるはず❤」
回復術を用い、後ろで待機するはずのクレオが自ら前線を買って出て、己を従者とまで言っている。彼女の持つ使命感が催眠と合わさり、隷属精神が生じたということだ――そして、クレオもそれを疑わない。
「分かった、じゃあクレオが蹴散らして、アタシは後衛で警戒する――それにしても、さ……」
「？」

「クレオって……おっぱいもお尻も大きいんだね……この姿になってようやく分かった、っていうかさ……❤❤」
「まぁ❤　ありがとうございます❤アリシアも締まった身体をして……素敵ですよ❤」
洞窟内の非日常感、そして催眠による同性好意の増幅によりアリシアはクレオをオンナとして見ていた。クレオが前に立つことにより、お尻はもちろん、歩く方向を見れば必ず目に入る、ゆっさゆっさと揺れる胸――刺激的な光景に思わず口にした言葉を、シスターは咎めることもなく、むしろ感謝さえ述べていた。
「ありがと――ねぇ、戦闘中にオナニーしちゃうかもしれないけど、いい？」
「えぇ、もちろんです❤存分になさってください❤」
「……ふひッ❤」
アリシアは下品な笑い声を漏らし、クレオのお尻を追う。ふたりは罠に注意しながら、ダンジョンを進んで行く……。

アリシア
-催眠冒険者-

【肉体Lv】 11　次のレベルまであと　509
【洗脳Lv】 1　次のレベルまであと　12

【職業】 催眠騎士見習い　【状態】 催眠状態
※自力解除不可

【能力】 HP　1052/1052　MP　147/147

力	84	肉欲	11
魔力	37	回復力	2
防御	32	自慰行為	7
魔法防御	101	洗脳力	4
すばやさ	79	イキやすさ	12
運	11	淫行知識	3

【洗脳ステータス解説】

肉欲……あらゆる性行為の洗脳経験値率
回復力……性行為をした際に回復するHP・MP率
自慰行為……戦闘中に自慰行為をする確率
洗脳力……自らの手で敵を洗脳する値。高いほど成功しやすい
イキやすさ……快感の増幅率。高いほど絶頂しやすい
淫行知識……洗脳レベルやラーニングによって覚えた淫行数

「この恰好？　別に変じゃないでしょ」

魔女の罠で催眠状態になっているアリシア。ダンジョンを攻略するために必要な恰好だと自分を納得させ、徐々に深い催眠に掛けられつつある。女性好きという面を強化されており、言動がいやらしい。

アリシア
-スキルシート-

【催眠状態】★・・・・
何らかの手段によって、正常な思考が行えない状態。
自力で回復する場合と他者の力によって回復する場合があるが、
その催眠の掛けられ方次第では回復も困難となる。

【魔力充填】★・・・・
催眠下のみ発生する特殊状態。マジックアイテムを持った場合、
溢れる魔力を催眠下の肉体が吸収し、常に回復するようになる。
満タンまで回復すると、余剰分は洗脳経験値として計算される。

【同性興奮】★★・・・
同じパーティに自分と同じ性別がいる場合、戦闘中に全能力が
アップし自慰行為を行う確率がアップする。

【魔剣順応】
魔力を持った剣を振るうと興奮し、肉欲の上昇率がプラスされる。

【HPをかばう・MPをかばう】
HP、またはMPがピンチになった際、減っていない方がダメージを
受ける。もしどちらも減っていた場合、力が大幅にアップする。

【トドメハンター】
敵が逃げ出した際、追撃の一撃を確定で放ちトドメを刺しやすくなる。
この時クリティカルが発生しやすく、また倒した場合は洗脳経験値が
多めに貰える。

「追い詰めるのって愉しいよね……❤」

手に持っているのは魔剣アンドラス。瞳が常にアリシアを監視し、
催眠を掛け続ける。やがて洗脳されつつあることを疑わなくなり、
呑まれるように快感へ溺れていく。誰にも気付かれないまま……。

クレオ
-催眠修道女-

【肉体Lv】 14 次のレベルまであと 1303
【洗脳Lv】 1 次のレベルまであと 12

【職業】 催眠格闘シスター 【状態】 催眠状態
※自力解除不可

【能力】 HP 1521/1521 MP 189/189

力	116	肉欲	8
魔力	57	回復力	5
防御	77	自慰行為	1
魔法防御	44	洗脳力	6
すばやさ	94	イキやすさ	8
運	45	淫行知識	6

【洗脳ステータス解説】

肉欲……あらゆる性行為の洗脳経験値率
回復力……性行為をした際に回復するHP・MP率
自慰行為……戦闘中に自慰行為をする確率
洗脳力……自らの手で敵を洗脳する値。高いほど成功しやすい
イキやすさ……快感の増幅率。高いほど絶頂しやすい
淫行知識……洗脳レベルやラーニングによって覚えた淫行数

「私の力、存分に見せてあげますね❤」

催眠に魅入られ、心の奥底にあった暴力的な部分が開花したクレオ。
しかしシスターとしての無意識か、振る舞いは丁寧なように見える。
大きな胸とお尻を振るってダイナミックに戦い、倒すことにこだわる。

クレオ
-スキルシート-

【催眠状態】★・・・・
何らかの手段によって、正常な思考が行えない状態。
自力で回復する場合と他者の力によって回復する場合があるが、
その催眠の掛けられ方次第では回復も困難となる。

【回復洗脳】★・・・・
回復手段を問わず、回復した計算値に応じ洗脳経験値を得る。
回復波及がある場合、洗脳経験値をシェアする形になる。
すなわち、クレオが回復し続ける限り洗脳が進行していく。

【討伐快感】★・・・・
敵を倒した際、気分が高揚し全能力値がアップする。戦闘中のみ。
累計討伐数が一定数を越える毎に、永続的に能力値がプラスされる。

【回復波及＋】
洗脳の力により、通常を超える値が波及されるようになる。

【武闘派】
ダメージを受ける毎に力とすばやさが増し、肉欲の値が上昇する。
戦闘終了後、上昇した値に応じHPとMPが回復し、洗脳経験値を得る。

【ムチムチボディ】
ヒト型・獣型・亜人型から狙われやすくなり、また洗脳しやすくなる。
洗脳した敵は一時的に味方になるが、非洗脳の敵が全滅すると
著しく能力が下がり洗脳状態が解除される。

「うふふ……色んな敵と戦いたい❤」

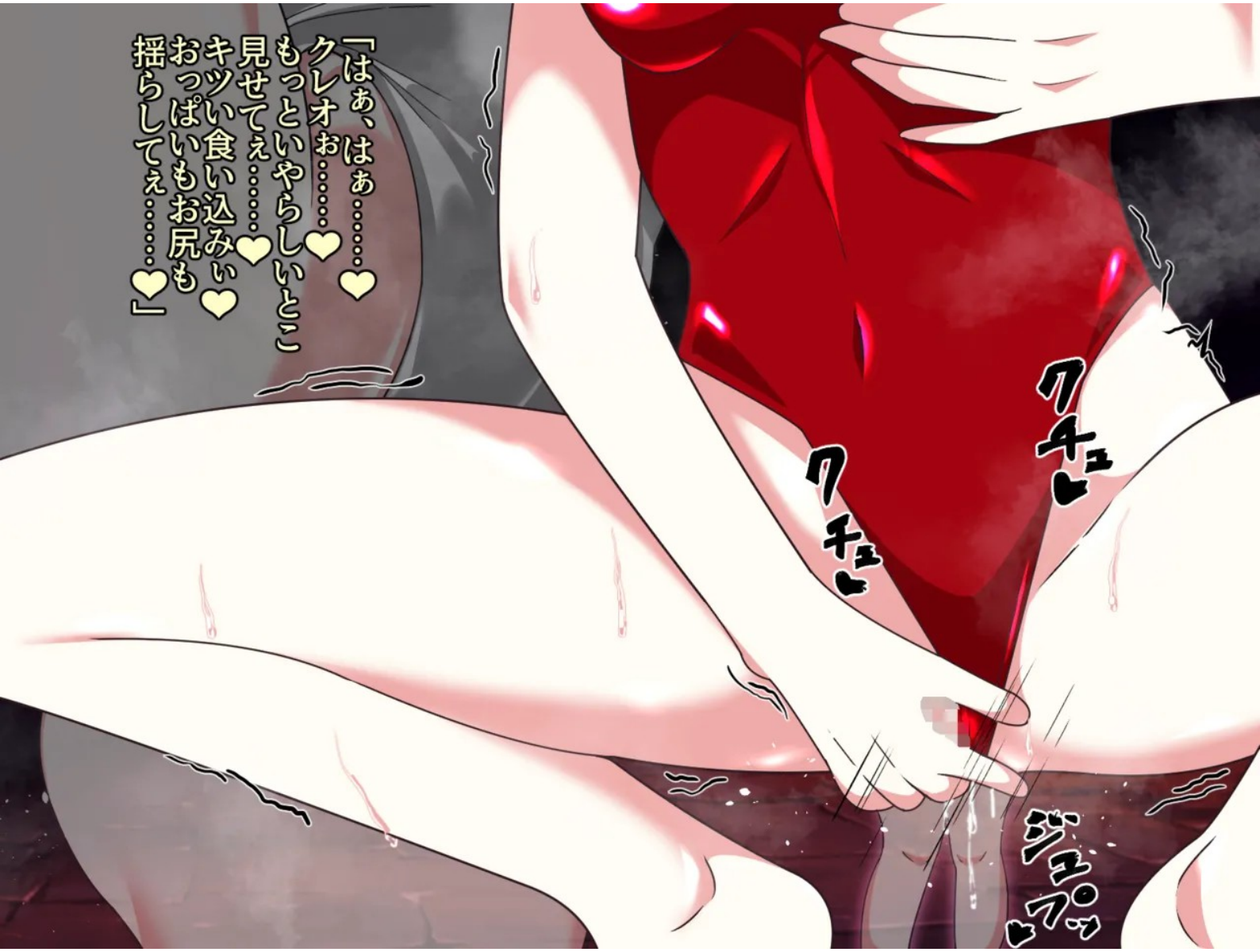
シスターとは思えない剛拳・剛脚で敵を蹴散らし、快感に酔うクレオ。
自らを洗脳する回復術を波及させ、味方の洗脳も嬉々として進める
存在になってしまった。その魅力は本人も理解しているようで、危険。

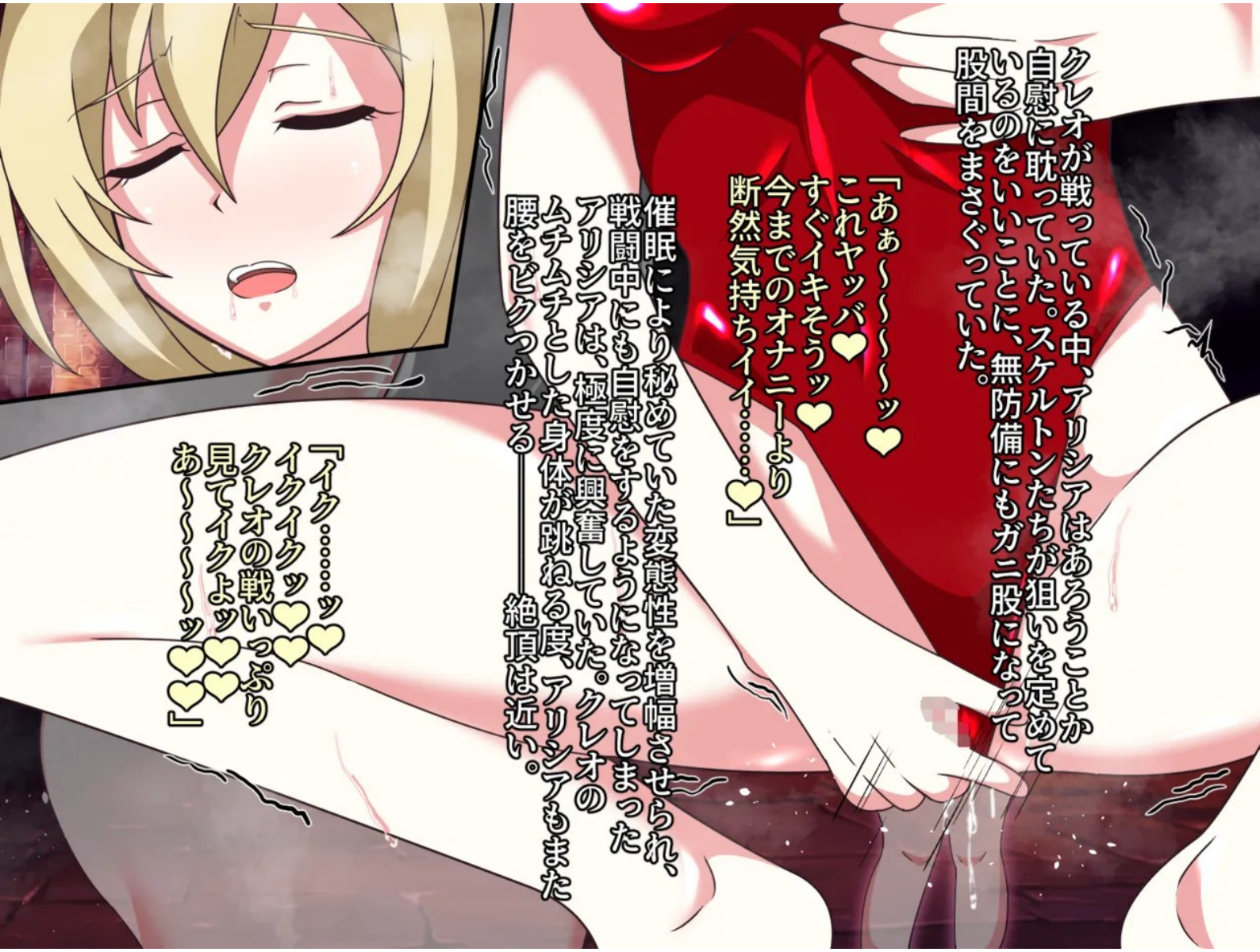
Chapter 2
欲望浸蝕
-Desire erosion-

「カタカタ……カカカ……」
ダンジョンを進み始めたアリシアとクレオを待ち受けていたのは、スケルトンの群れだった。
「出ましたね」
骸骨だけになった剣士は考える力もなく、生きているモノを襲うことしか考えない。クレオは顔を引き締めると、拳を強く握った。
「亡骸を操られる憐れな亡者よ……私の力で苦しみから解放してあげましょう」
シスターとして救わなければ、という思いがクレオを走らせる。
「カッ――――!!!」

「ほッ!!!」
クレオの蹴りが勢い良く炸裂し、スケルトンの頭部を吹き飛ばす。
「カァッ……!?」
「キキ……」
「さぁ掛かって来なさい。このシスター・クレオが相手です!!!」
スケルトンは群れとなってターゲットを襲う。亡者たちの標的は、完全にクレオに絞られた――――!

（あぁ……快感です♥　肉のない骨畜生だからいくら思い切り砕いても何の罪にもなりません♥　私は、本当はこんな風に手加減なしで戦いたかった――――♥）
群れになって襲い来るスケルトンを蹴散らしながら、クレオは笑っていた。
（昂る……♥）
（もっともっと強い敵、いろんな敵と戦って♥この拳を血に染めてでも強くなりたい♥――――……アリシアの傍に相応しい存在に……ッ♥♥）
キュン！


「はぁ、はぁ……♥
クレオお……♥
もっといやらしいとこ
見せてぇ……♥
キツい食い込みぃ♥
おっぱいもお尻も
揺らしてぇ……♥」
クチュ
クチュ
ジュプッ


クレオが戦っている中、アリシアはあろうことか
自慰に耽っていた。スケルトンたちが狙いを定めて
いるのをいいことに、無防備にもガニ股になって
股間をまさぐっていた。
「あぁ～～～ッ♥
これヤッバ♥
すぐイキそうッ♥
今までのオナニーより
断然気持ちイイ……♥」
催眠により秘めていた変態性を増幅させられ、
戦闘中にも自慰をするようになってしまった
アリシアは、極度に興奮していた。クレオの
ムチムチとした身体が跳ねる度、アリシアもまた
腰をビクつかせる――絶頂は近い。
「イク……ッ♥
イクイクッ♥♥
クレオの戦いっぷり
見てイクよッ♥♥
あ～～～ッ♥♥
♥」

「ボウッ!!!」
「……ッ!?　スケルトンを操っていた霊魂……!?」
アリシアの嬌声がダンジョンに響くというところで、クレオの吹き飛ばしたスケルトンから何かが飛び出した。
死者を操る、スピリットの類――。
肉弾戦を挑むにはやや不利な相手だ。
「クケケケ――――」
紅い魂と青い魂が不気味に笑うと、一瞬にして飛んだ!!
「は――――早い……ッ!?」

「はぁッ――――あッ!?」
「ひゥッ!!?」
クレオの鋭い蹴りをすり抜け、また自慰に耽るアリシアの隙を突いて、霊魂が肉体へ侵入する。
その衝撃か、ふたりはビクリと反応して動けなくなった。

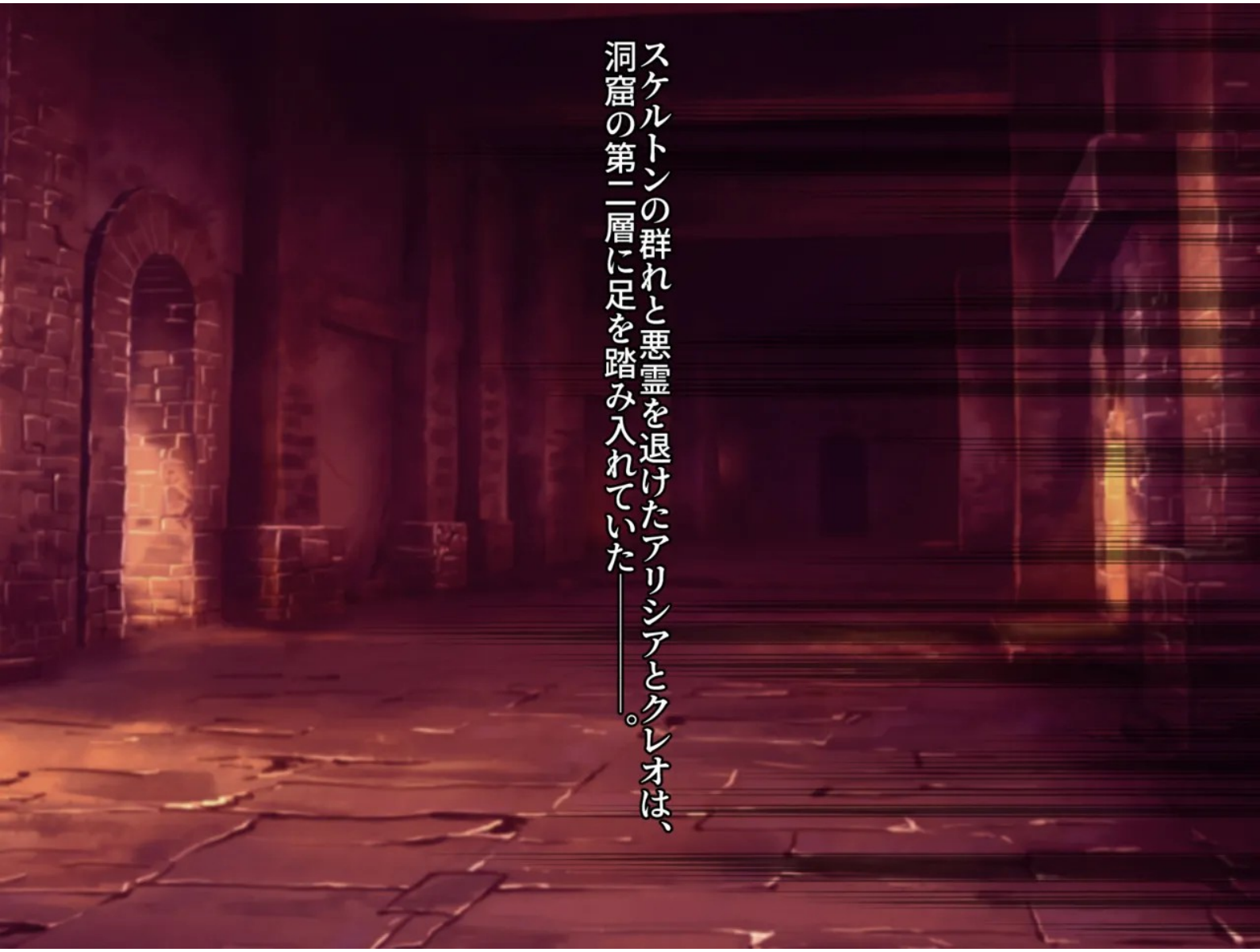
「えッ……!?　い、今何か……あぁッ!!?」
「くッ……スケルトンだけでは飽き足らず、生きた私たちの肉体に憑依するとは――――あ、アリシアッ!!　今のは邪悪な霊魂です!!　気を強く保って、霊体に意識をう、奪われないように……!?　うッ、も、もう浸蝕が……!?」
生者の肉体に入り込んだ霊魂は、少なからず悪影響を与えるという。アリシアもクレオも、一瞬だけ催眠が解け正気に戻ったかのように振る舞うが――――。
「我々に相応しい肉体にしてやろう」

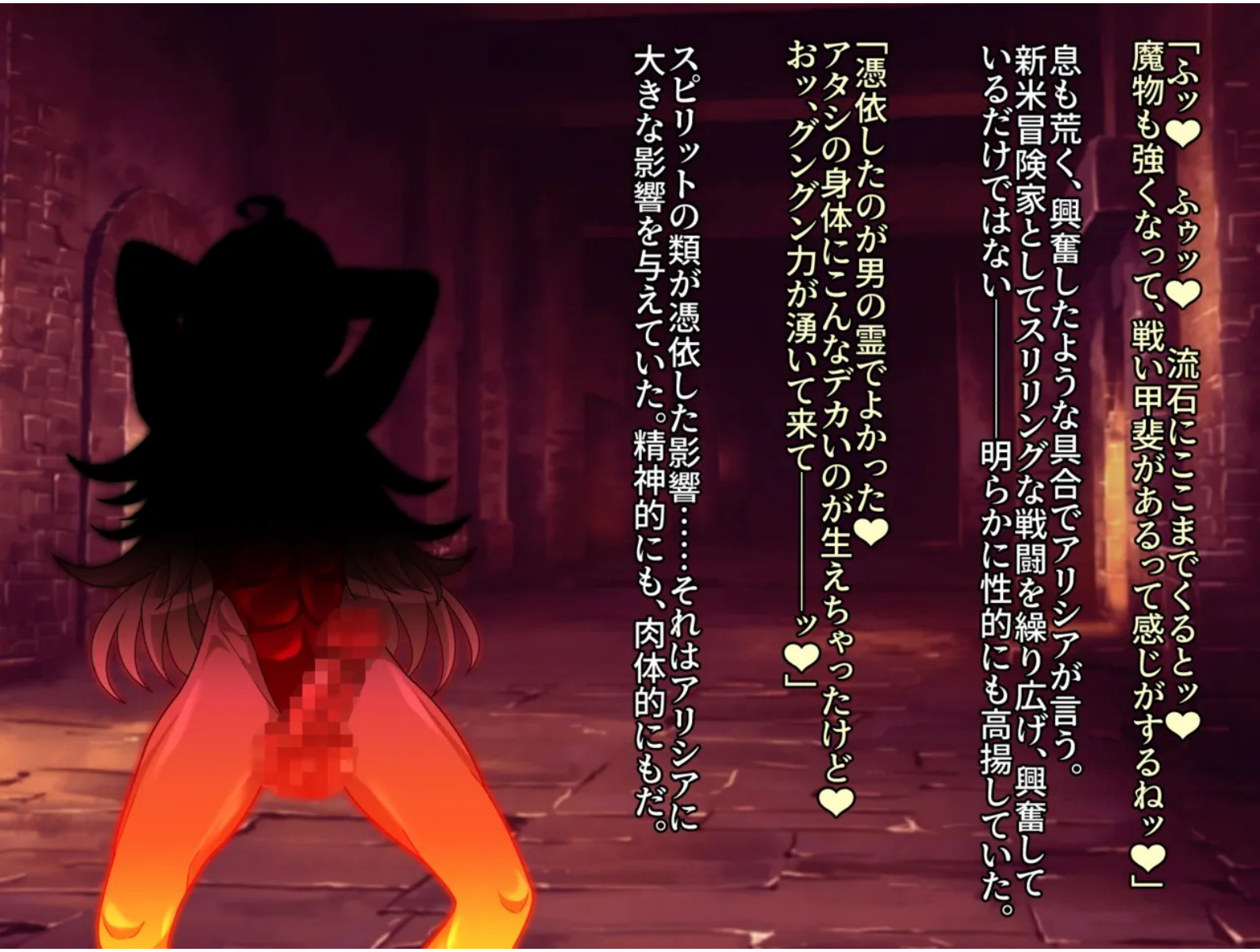
ガッ!!?
ギッ!!?

悪霊がふたりの身体に入り込むと、すぐに変化が起こる。
その衝撃にヒトとは思えないような叫びを挙げ、
顔にはビキビキと血管を走らせた。
「ククク……!!
これは好都合
既に出来上がっている
肉体だったとはな」
「あ……ッ!?　がッ……!!?」
「おぉおぉッ!?　の、呑まれ……ッ!?」
「我々がお前たちに新たな力をやろう。
その快感に溺れた時、お前たちは新たな
闇の使者になるのだ……ハハハハッ！」
「――ッ!!?」
「～～～～～～～～ッ!!?」

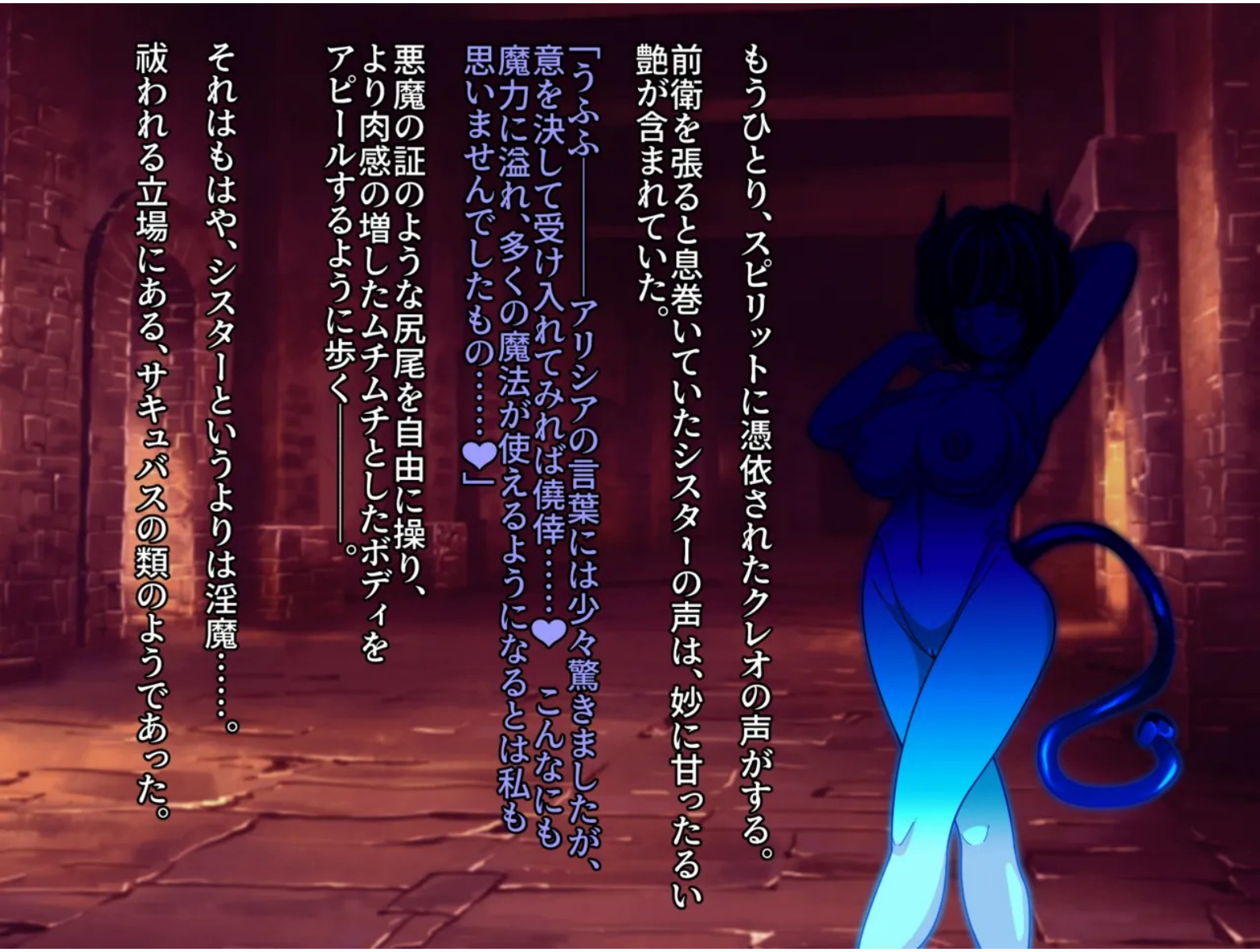
ドクン
「いッ――ぎいいいいいいッ!!?」
ドクン
「んおおおおおおおおッ♥♥♥」
ドクン
ドクン
ドクン

「ひッ……!?　こ、これ……男の……チンポ!?」
「……お、重ッ!?」
「わ、私にも尻尾が生えてしまいました……これはまさしく、あの悪霊の呪い――――んふッ♥♥」
霊魂に憑依されたアリシアは腕のような太さの男性器を、クレオは長い尻尾が生え、角まで生えてしまった。悪霊は悪魔の類だったのだろう。
「こ、こほん――――♥アリシア、落ち着いてください。私はシスター、呪いを打ち消す技法も心得ております♥」
「う、うん……でも……♥」
ずっしりとした逸物の重さと、血が巡る快感がアリシアを支配していた。
「この呪い、使えないかな……♥」


スケルトンの群れと悪霊を退けたアリシアとクレオは、
洞窟の第二層に足を踏み入れていた――。


「ふッ❤　ふウッ❤　流石にここまでくるとッ❤
魔物も強くなって、戦い甲斐があるって感じがするねッ❤」
息も荒く、興奮したような具合でアリシアが言う。
新米冒険家としてスリリングな戦闘を繰り広げ、興奮しているだけではない――明らかに性的にも高揚していた。
「憑依したのが男の霊でよかった❤
アタシの身体にこんなデカいのが生えちゃったけど❤
おッ、グングン力が湧いて来て――ッ❤」
スピリットの類が憑依した影響……それはアリシアに大きな影響を与えていた。精神的にも、肉体的にもだ。

「チンポから力が溢れて来る……ッ♥
これが男のモノの力……アタシの身体に血が巡って、
熱くなってるの分かるよ……ッ♥♥」
男根を勃起させ、大きくアピールするように見せつける
アリシア。ガニ股になっているのは、その剛直と玉袋の重みが
取らせる自然なポーズだった。髪も解き、美しかった金髪は
さらに色が抜け、肌は洞窟の色に妖しく輝く色になりつつ
ある――しかし、アリシアはその変化を疑いもせず、
非常に肯定的に受け入れているようだった……。
「悪霊に取り憑かれたって、こうやって有効利用できるなら
悪いことじゃないじゃん♥　呪いを祓うのはもう少し後に
して、この洞窟の攻略に役立てた方がよくない？」
――とは、アリシアの言葉だ。
「仰る通りですわ♥
これほどまでに素晴らしい力……♥
ヒトの身では、なかなか辿り着けませんもの♥」



もうひとり、スピリットに憑依されたクレオの声がする。
前衛を張ると息巻いていたシスターの声は、妙に甘ったるい艶が含まれていた。

「うふふ――アリシアの言葉には少々驚きましたが、意を決して受け入れてみれば僥倖……♥　こんなにも魔力に溢れ、多くの魔法が使えるようになるとは私も思いませんでしたもの……♥」

悪魔の証のような尻尾を自由に操り、
より肉感の増したムチムチとしたボディを
アピールするように歩く――。

それはもはや、シスターというよりは淫魔……。
祓われる立場にある、サキュバスの類のようであった。

より大きくなった胸、お尻、それに生えている尻尾と角。
黒髪に混ざったピンク色のメッシュが、かつてのクレオとは
異なる存在になっていることを明確にしていた。
「この角と尻尾が、私に強大な魔力を与えてくれる……♥
もう肉体を使った戦闘は遠慮して、後方から洗脳魔法を
駆使した魔物の同士討ちを見るのが愉しくて……ッ♥」
ダンジョンに入る前は自ら拳を振るうことすらためらって
いたシスター・クレオは――自らの手を汚すことなく、
遭遇したモンスター同士で争わせるほどの邪な魔法を
使うほどまでに精神が変容していた。
「私の魔法は、例え屈強なオーガであろうと、
意思の無い魔法生物であろうと平等……♥
仲間同士で殺し合う様を見るのが、いちばんの愉悦です♥」
悪霊による影響か、それともクレオ自身に秘められた
天性のモノか――今の彼女は、シスターとは対極の
位置にいる魔物になりつつある。

「じゃあ、行こっかクレオ――――ぎひひッ♥♥」
「まぁ、お下品ですわねアリシア……うふふッ♥♥」
催眠、憑依、肉体改造――――ダンジョンは短いというが、
ふたりに起きた変化は濃厚過ぎる程だった……。
グツグツと煮えたぎる【欲望】は、やがて両者を
呑み込むであろう……。

アリシア
-欲望に取り憑かれた姿-

【肉体Lv】 24　次のレベルまであと　7411
【洗脳Lv】 6　次のレベルまであと　152

【職業】 ふたなり催眠騎士　【状態】 催眠・憑依・ふたなり
※自力解除不可&解除抵抗行動

【能力】 HP 2847/3505　MP 216/320

力	178	肉欲	45
魔力	98	回復力	22
防御	204	自慰行為	16
魔法防御	189	洗脳力	25
すばやさ	142	イキやすさ	34
運	66	淫行知識	15

【憑依時の行動】

霊魂に憑依された場合、肉体の性別にかかわらず憑依した霊魂の影響を強く受ける。アリシアの場合、男性寄りの個体に憑依されたため、肉棒が生えふたなり状態になった。しかし悪いことばかりではなく、雄々しいシンボルによって能力値がパワーアップした。意識こそアリシアのモノであるが、行動や言動が荒っぽくなり、行動を共にするクレオをいつ襲ってもおかしくないほど発情中。

「はぁ～～ヤバッ❤　チンポギンギン❤❤」

催眠状態に加え、霊魂に憑依されふたなりになったアリシア。重い男性器のバランスを取るため、ガニ股でしっかりと支えている。自慰行為も男性器を使ったそれになり、魔物すら恐怖を感じる。

アリシア
-スキルシート-

【催眠状態】★★★・・
何らかの手段によって、正常な思考が行えない状態。
催眠状態が進行すると解除できないばかりか、解除しようとすると抵抗をするようになり、解除者を逆に催眠状態にする行動を取る。

【リビドータンク】★★★・・
催眠＋憑依＋ふたなり状態で変化したスキル。マジックアイテムと連動し、行動の度に精子が貯まっていく。射精に応じ強力な洗脳波が周囲に放たれ、催眠がさらに深くなり、また未洗脳者を支配する。

【レズレイパー】★★★★・
同性興奮＋ふたなり状態で変化したスキル。女性と見るや股間のシンボルで犯し、気持ち良く射精することしか考えられなくなる。

【ふたなり魔剣】
剣を魔力で隠しており、陰茎を振っただけでも敵が倒せる。

【かばわせる】
洗脳、またはレイプにより虜とした存在にアリシアをかばわせ、敵同士で延々と同士討ちさせることができる。HP・MPの条件なし。

【憑依強化】
悪霊と同化しているため、経験値を得た場合憑依している霊魂にも経験値が入る。肉体と同時にレベルアップした場合、完全に同化し精神が霊魂のそれになっていく。同化後の成長率は著しく高くなる。

「ぎひひッ❤　魔物同士で殺し合え❤」

霊魂が憑依したことにより、肉体を強化され精神的にも変容したアリシア。魔物とのエンカウントでは確実に負けることはない。
クレオをその男根で支配するのも、もはや時間の問題だろう……。

クレオ

-欲望に取り憑かれた姿-

【肉体Lv】 32 次のレベルまであと 21033

【洗脳Lv】 6 次のレベルまであと 152

【職業】 淫魔化進行中 【状態】 催眠・憑依・淫魔化

※自力解除不可&解除抵抗行動

【能力】 HP 2106/4001 MP 312/589

力	143	肉欲	87
魔力	278	回復力	51
防御	189	自慰行為	25
魔法防御	269	洗脳力	92
すばやさ	233	イキやすさ	64
運	198	淫行知識	38

【憑依時の行動】

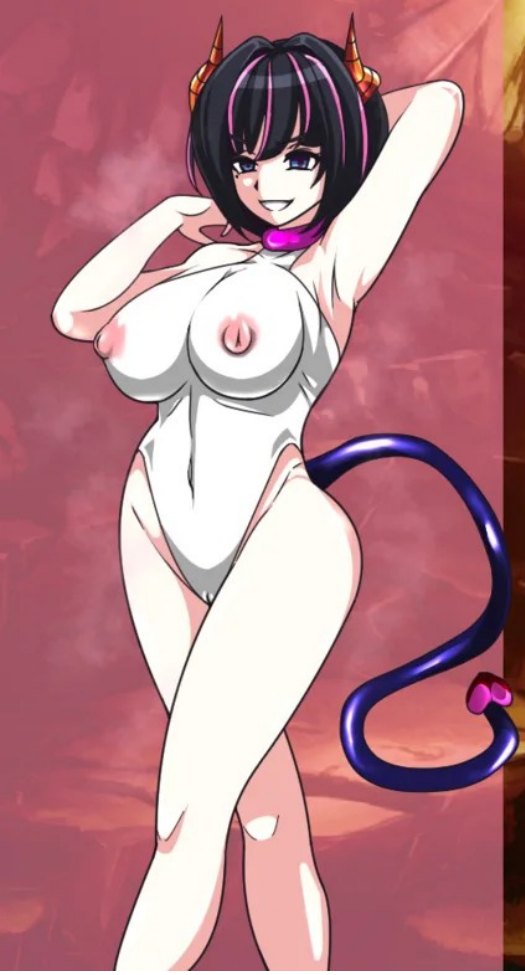
霊魂に憑依された場合、肉体の性別にかかわらず憑依した霊魂の影響を強く受ける。クレオの場合、取り憑いた霊魂が女性淫魔の魂であったため、角や尻尾が生えてしまった。しかしこの悪魔の象徴こそ、無尽蔵に魔力が湧き活力がみなぎる源であるため、クレオはあらゆる魔法に加え、禁呪とされる洗脳魔法を使える。使えば使うほど、そのシスターの肉体は淫魔と化していくのだ。

「うふふ……私の魔法で道を拓きますわ❤」

催眠だけでなく、霊魂にも憑依され淫魔と化しつつあるクレオの姿。自然にしているだけでもサキュバスのフェロモンが漏れ出てしまい、傍にいるだけでも理性を狂わせる魔性を身に付けてしまった。

クレオ

-スキルシート-



【催眠状態】★★★★・
何らかの手段によって、正常な思考が行えない状態。
催眠状態が進行すると解除できないばかりか、解除しようとすると抵抗をするようになり、解除者を逆に催眠状態にする行動を取る。

【淫魔の施し】★★★・・
催眠＋淫魔化で変化したスキル。敵味方問わず回復することが可能になり、猛烈な淫気で解除不能な洗脳を施す。敵が洗脳された場合、同士討ちでその攻撃を受けたモノをも洗脳するようになる。

【死を超える快感】★★★★★
催眠＋淫魔化で変化したスキル。クレオが討伐した際、死んだモノを強化したしもべとして復活させ、一時的に戦わせることができる。

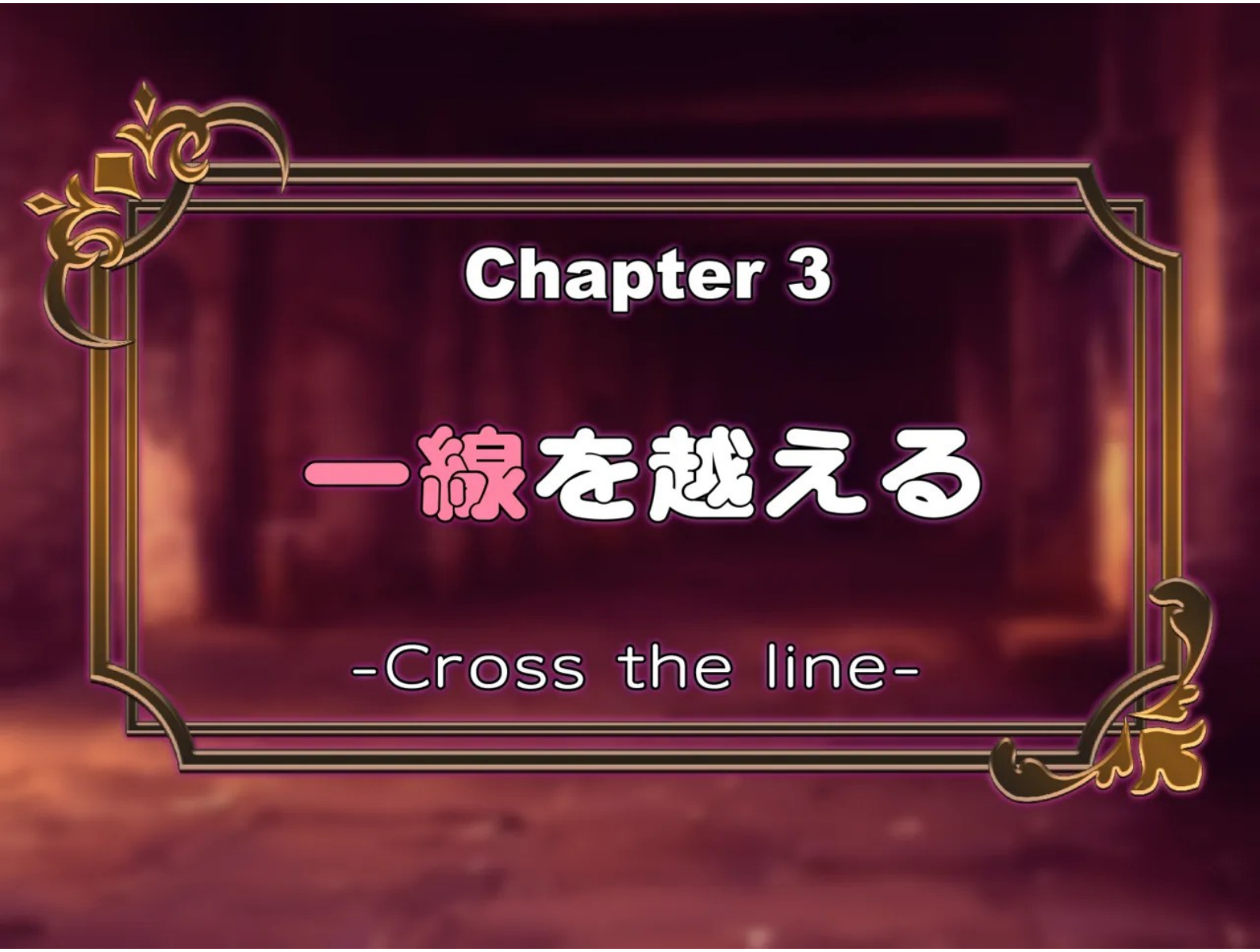
【シェアリングヒール】
膨大な魔力で回復が波及し、さらにHP・MPの自動回復も付与する。

【肉体改造】
敵を倒す度に「胸」「お尻」「淫魔力」のいずれかのポイントを得る。
これを振り分けることでそれぞれの値が上昇し、より淫魔に近付く。

【サキュバスボディ】
悪霊と同化しているため、経験値を得た場合憑依している霊魂にも経験値が入る。肉体と同時にレベルアップした場合、完全に同化し精神が霊魂のそれになっていく。同化後の成長率は著しく高くなる。

「さぁ、アナタも私の糧にしてあげるわ」

淫魔の霊魂と精神が同化しつつあるクレオ。他者を喰らうスキル、しもべとして扱う魔法など、シスターとは思えない搦め手を用いる。
いつアリシアが襲って来てもいいように、心の準備をしている。


Chapter 3
一線を越える
-Cross the line-

催眠迷宮の第二層を、醜いオーガが闊歩していた。
オーガはヒトなど簡単に潰せそうな腕力を有し、知能もない凶暴な魔物であると知れ渡っているが――。
この個体はある命令に従っていた。

「キ、キィッ……!!」

闊歩するオーガから隠れるように、同じ魔物であるはずのホフゴブリンが息をひそめている。

ゴブリンは本来、長いモノに巻かれろの精神で自分より強い高位の存在に付き従う弱気者だ。

献身的に貢献し、群れの意識が強く集団で冒険者を襲い時にはヒトの住む集落を襲うことさえある。

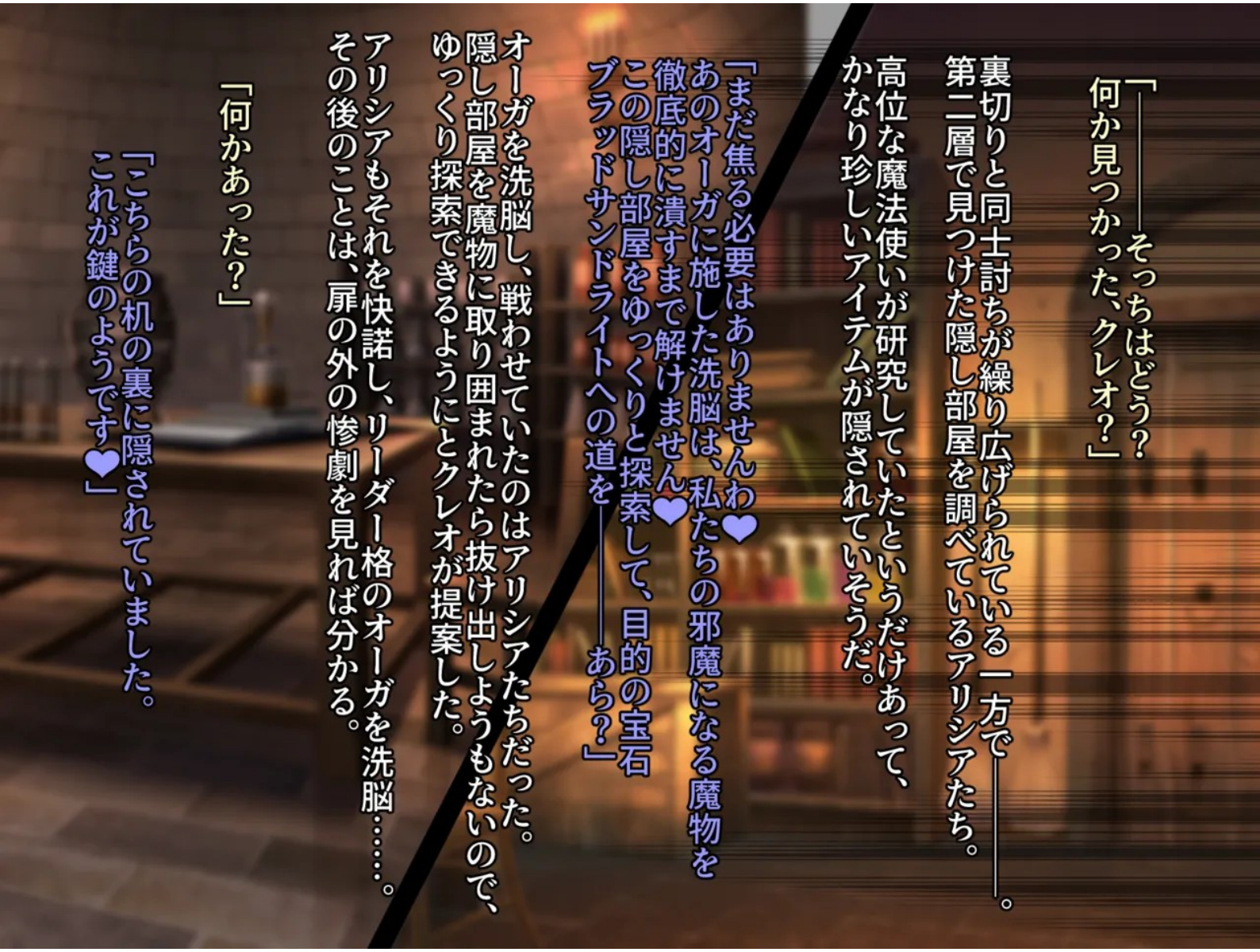
ダンジョンの中に潜むゴブリン軍団ともなれば、その統率も信頼も確かな社会が形成されるはず――。

だが今……このゴブリンたちが逃げているのは、従うべき大将であるオーガだった。

襲うべき人間――らしき存在に何かをされたオーガが、部下のゴブリンを次々に潰し始めたのだ。

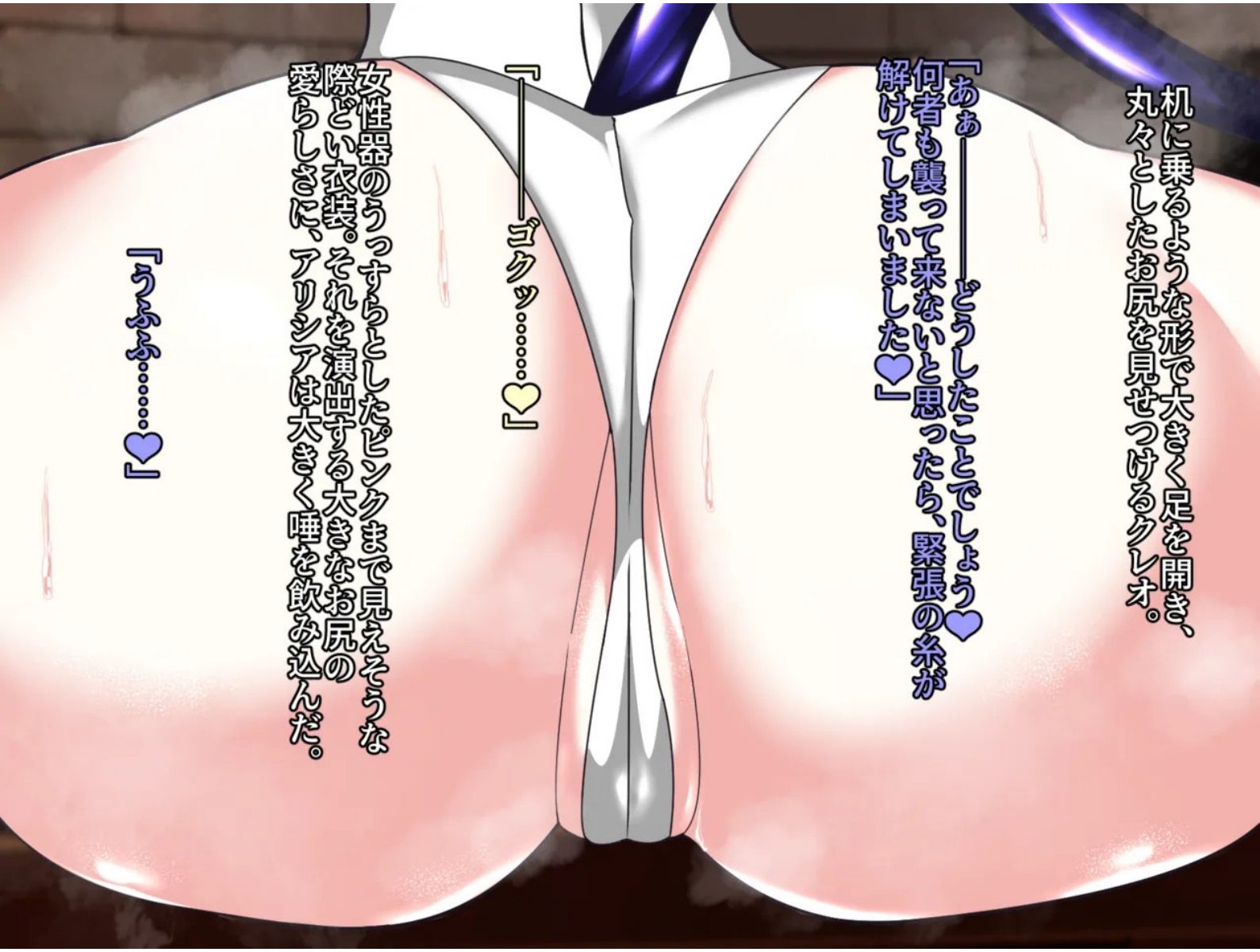
その圧倒的な力に、ゴブリンは散り散りになって逃げるしかなかった。

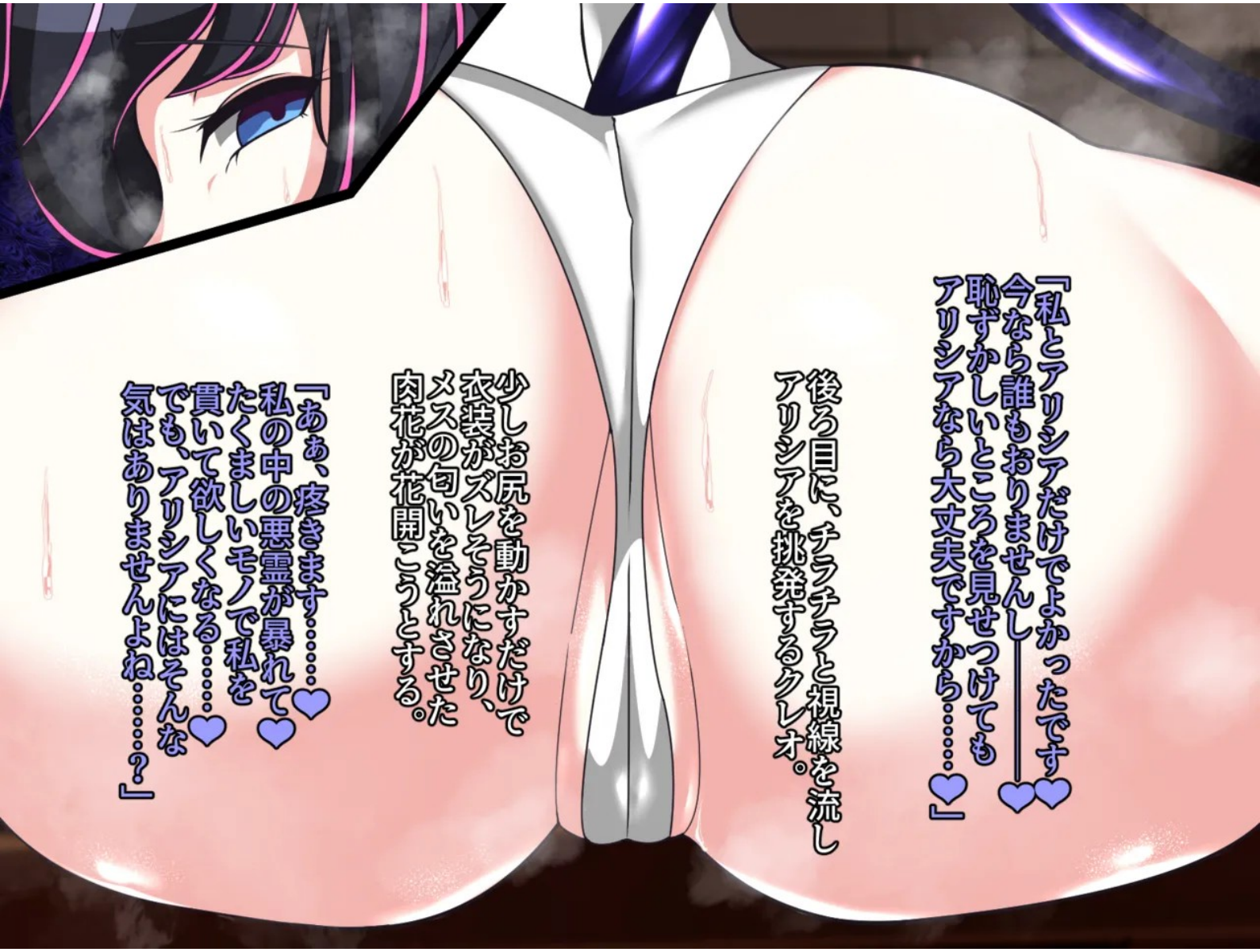
少ない頭脳を何者かの手により最大限にまで強化されたオーガが、隠れていたゴブリンを見つけた。
何頭もの同胞を潰した、棘と血の付いた棍棒を振り下ろし、また1匹の魔物が命を絶たれる――――。
第二層は魔物同士が殺し合う、地獄の様相を呈していた。

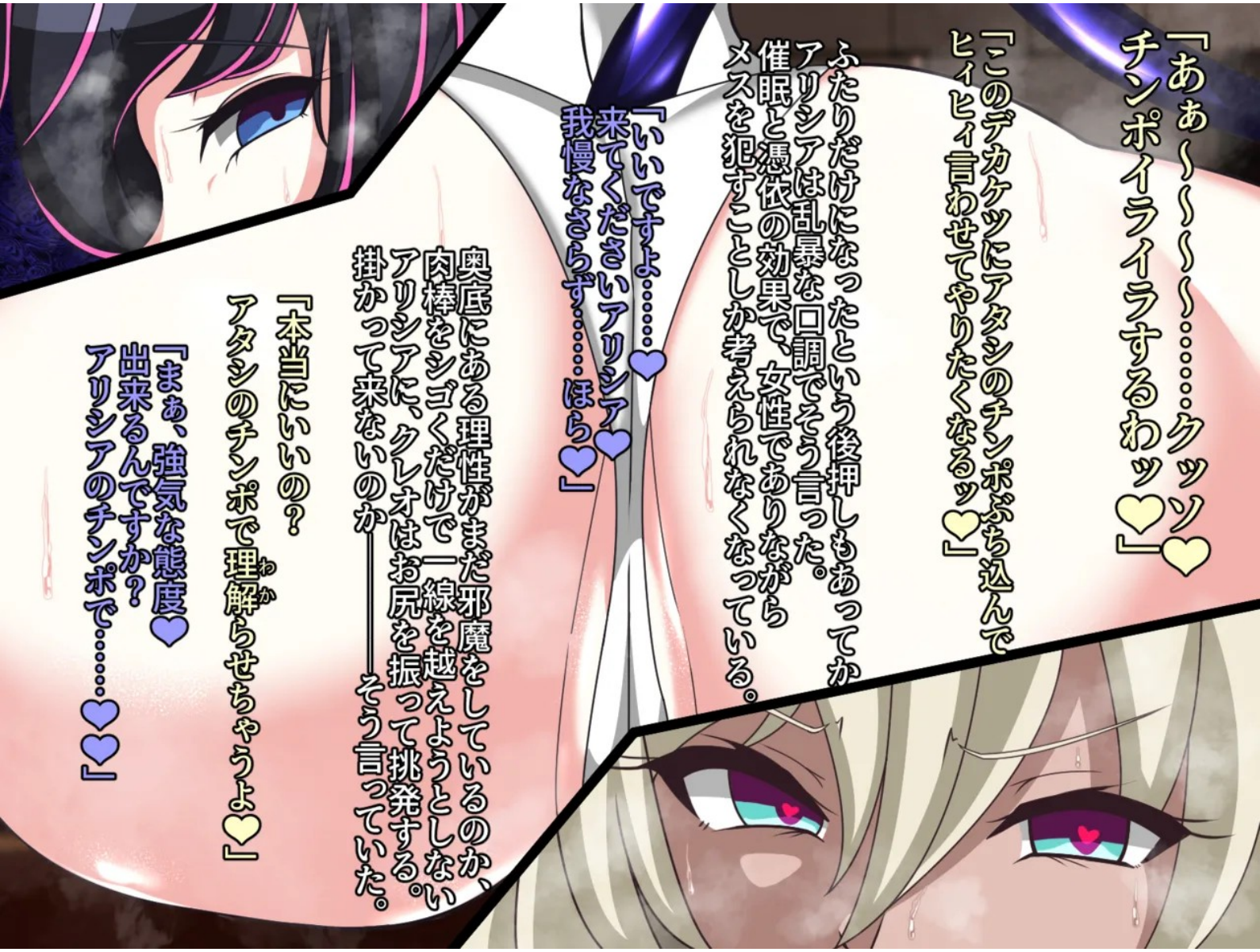

「――そっちはどう？
何か見つかった、クレオ？」
裏切りと同士討ちが繰り広げられている一方で――。
第二層で見つけた隠し部屋を調べているアリシアたち。
高位な魔法使いが研究していたというだけあって、
かなり珍しいアイテムが隠されていそうだ。
「まだ焦る必要はありませんわ❤
あのオーガに施した洗脳は、私たちの邪魔になる魔物を
徹底的に潰すまで解けません❤
この隠し部屋をゆっくりと探索して、目的の宝石
ブラッドサンドライトへの道を――あら？」
オーガを洗脳し、戦わせていたのはアリシアたちだった。
隠し部屋を魔物に取り囲まれたら抜け出しようもないので、
ゆっくり探索できるようにとクレオが提案した。
アリシアもそれを快諾し、リーダー格のオーガを洗脳……。
その後のことは、扉の外の惨劇を見れば分かる。
「何かあった？」
「こちらの机の裏に隠されていました。
これが鍵のようです❤」

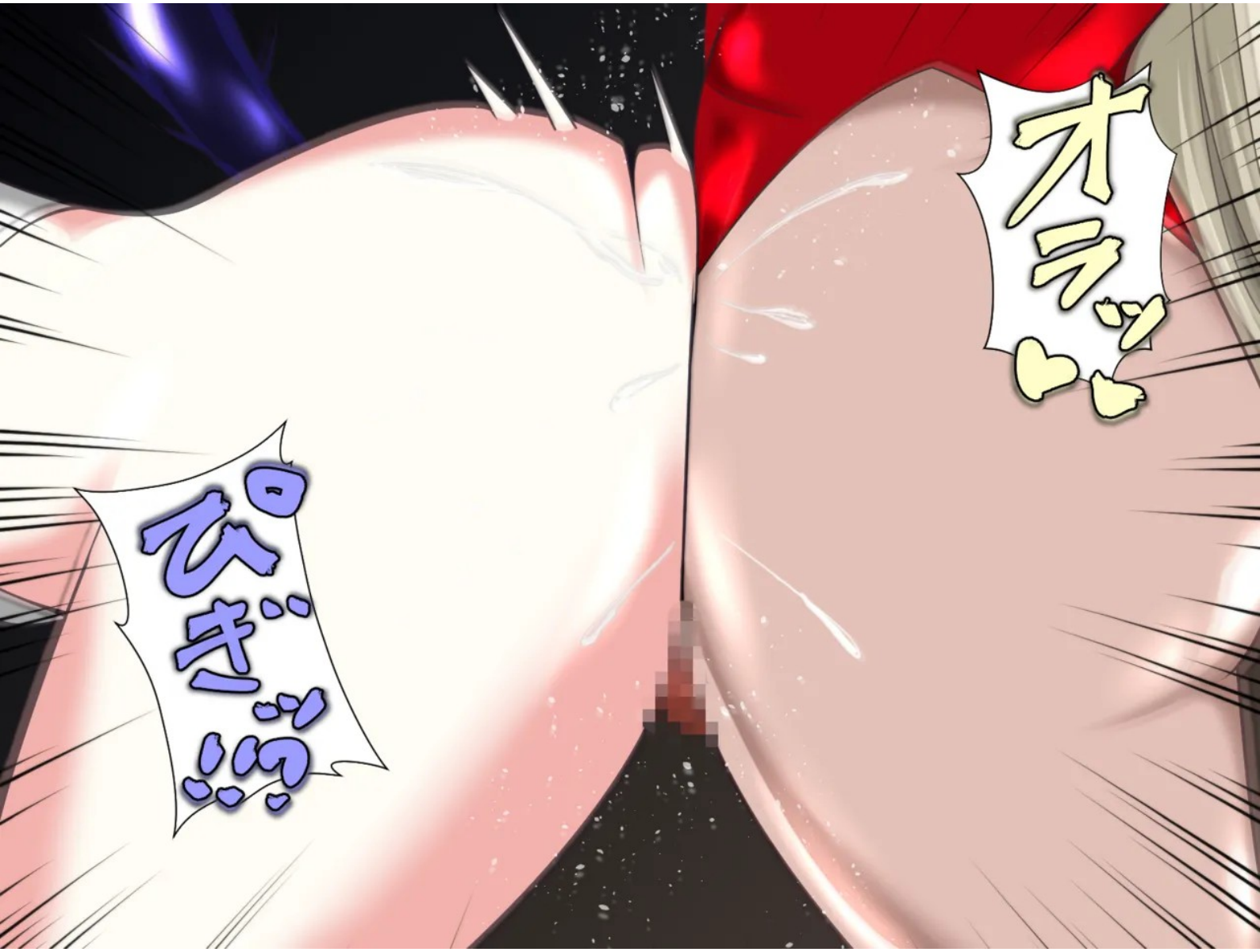
尻尾と角の生えたクレオが見せたのは、
古ぼけた鍵だった。
「きっとこれが洞窟の奥への扉を開く鍵でしょう♥
ブラッドサンドライトはそこにあるはずですわ♥」
「そうだね♥
表が静かになったら、奥への道を探してみよう♥」
アリシアの言葉に頷いたクレオだったが――。
わざとらしくバランスを崩した。

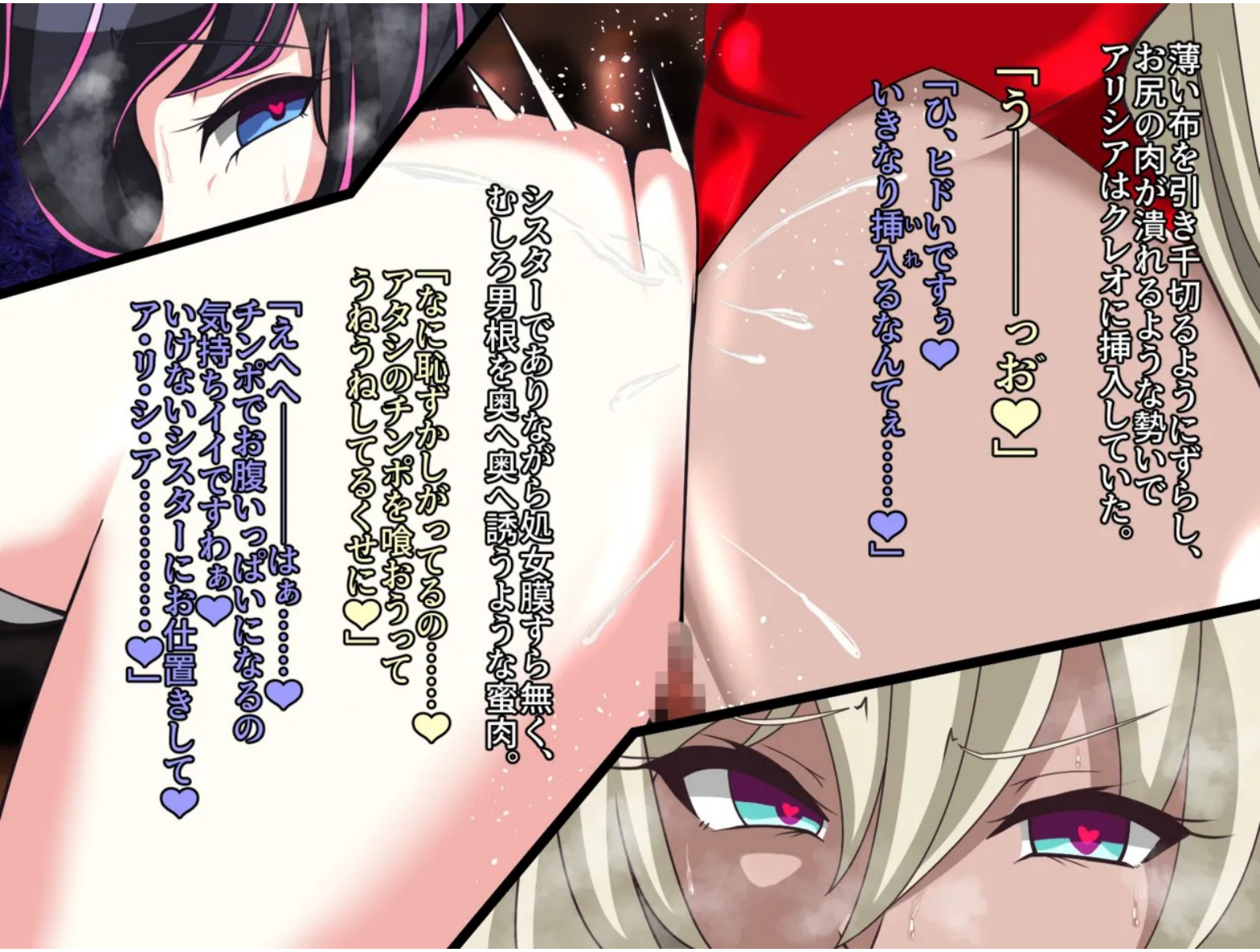
あン♥
ズサッ♥

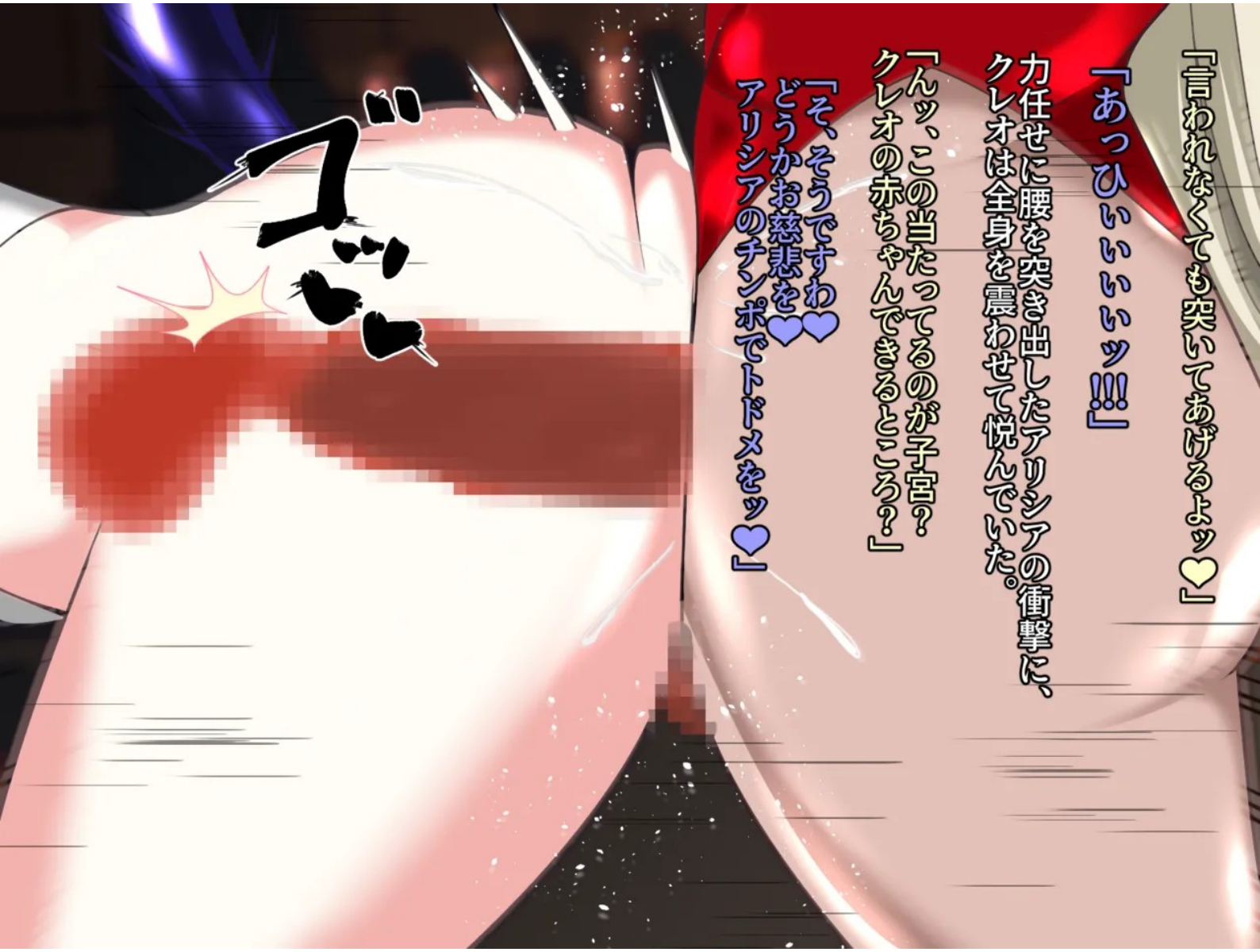

机に乗るような形で大きく足を開き、
丸々としたお尻を見せつけるクレオ。
「あぁ――――どうしたことでしょう♥
何者も襲って来ないと思ったら、緊張の糸が
解けてしまいました♥」
「――――ゴクッ……♥」
女性器のうっすらとしたピンクまで見えそうな
際どい衣装。それを演出する大きなお尻の
愛らしさに、アリシアは大きく唾を飲み込んだ。
「うふふ……♥」


「私とアリシアだけでよかったです♥
今なら誰もおりませんし――♥
恥ずかしいところを見せつけても
アリシアなら大丈夫ですから……♥」
後ろ目に、チラチラと視線を流し
アリシアを挑発するクレオ。
少しお尻を動かすだけで
衣装がズレそうになり、
メスの匂いを溢れさせた
肉花が花開こうとする。
「あぁ、疼きます……♥
私の中の悪霊が暴れて♥
たくましいモノで私を
貫いて欲しくなる……♥
でも、アリシアにはそんな
気はありませんよね……？」


「あぁ～～～～……クッソ♥チンポイライラするわッ♥」
「このデカケツにアタシのチンポぶち込んでヒィヒィ言わせてやりたくなるッ♥」
ふたりだけになったという後押しもあってかアリシアは乱暴な口調でそう言った。
催眠と憑依の効果で、女性でありながらメスを犯すことしか考えられなくなっている。
「いいですよ……♥来てくださいアリシア♥我慢なさらず……ほら♥」
奥底にある理性がまだ邪魔をしているのか、肉棒をシゴくだけで一線を越えようとしないアリシアに、クレオはお尻を振って挑発する。
掛かって来ないのか――そう言っていた。
「本当にいいの？アタシのチンポで理解らせちゃうよ♥」
「まぁ、強気な態度♥出来るんですか？アリシアのチンポで……♥」


オラッ♡
ぴきぃ!?


薄い布を引き千切るようにずらし、
お尻の肉が潰れるような勢いで
アリシアはクレオに挿入していた。
「う――――つお♥」
「ひ、ヒドいですぅ♥
いきなり挿入るなんてぇ……♥」
シスターでありながら処女膜すら無く、
むしろ男根を奥へ奥へ誘うような蜜肉。
「なに恥ずかしがってるの……♥
アタシのチンポを喰おうって
うねうねしてるくせに♥」
「えへへ――――はぁ……♥
チンポでお腹いっぱいになるの
気持ちイイですわぁ♥
いけないシスターにお仕置きして♥
ア・リ・シ・ア……♥」

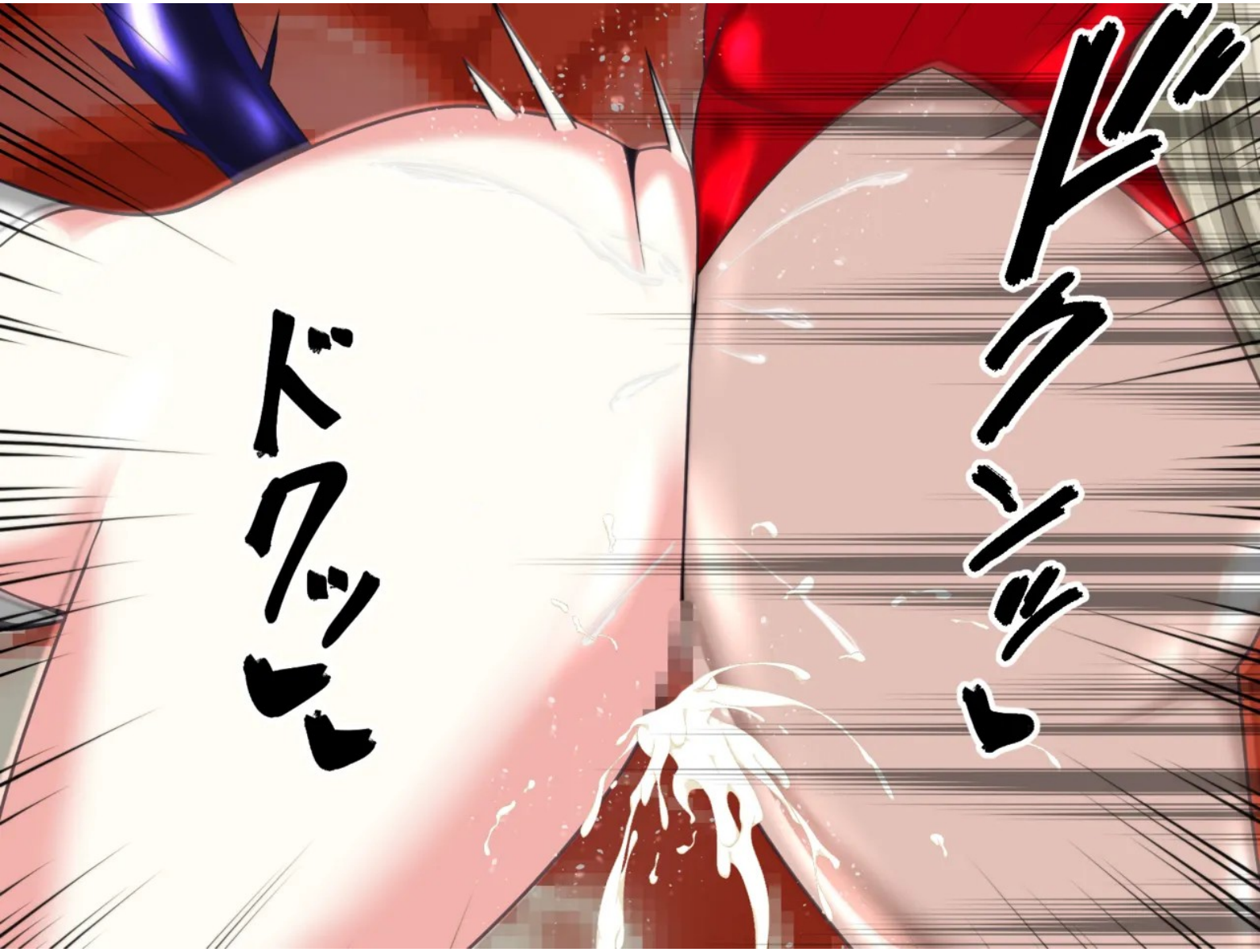

「言われなくても突いてあげるよッ♥」
「あっひいいいいッ!!!」
力任せに腰を突き出したアリシアの衝撃に、
クレオは全身を震わせて悦んでいた。
「んッ、この当たってるのが子宮？
クレオの赤ちゃんできるところ？」
「そ、そうですわ♥♥
どうかお慈悲を♥♥
アリシアのチンポでトドメをッ♥」
ゴゴゴ

「あんッ♥♥♥」
グイッ

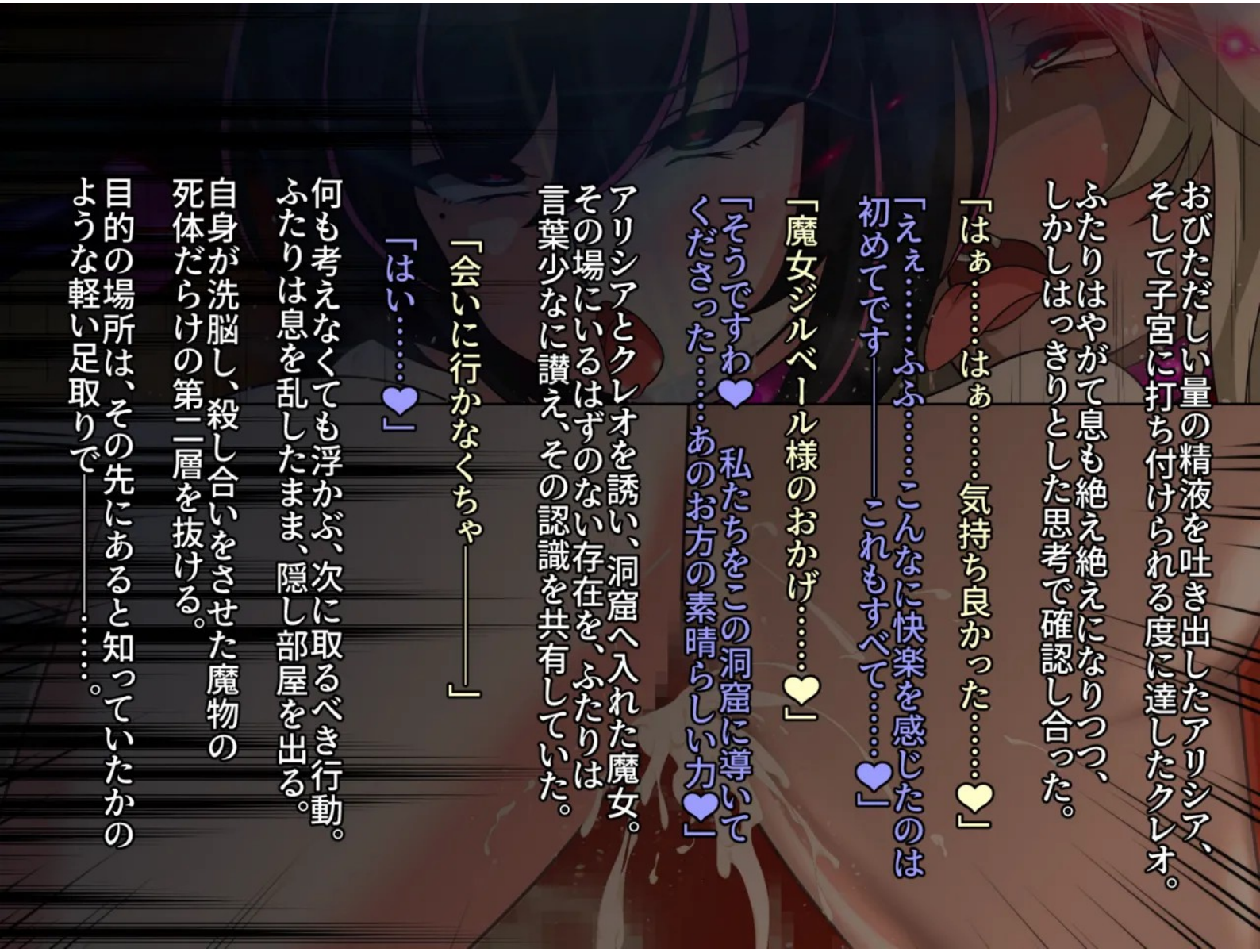
性器同士で結合しながら、アリシアは強引に衣装をずらし、クレオの大きな胸を揉みしだく。
「でっか……♥このおっぱい揉みたかったんだよね♥アタシのモノにしちゃいたい……♥」
腰を振りながら耳元で囁くアリシア。クレオもまんざらではない眼で笑みを浮かべ、力と欲望に任せたレイプまがいの行為を悦んでいる。
「子宮を甘突きしながらそのようなことを言われたら……私も本気にしてしまいますわ♥♥」
「クレオがイイって言うまでハメる♥」

アリシアの腰遣いにクレオは甘い声を挙げ、身をよじっていた。
「あッん……ゴツゴツした感触♥オンナを殺すチンポ……ッ♥♥」
「クレオの膣内も気持ちイイよ♥アタシのチンポを奥まで誘って……♥」
何度も突き込む内に、両者の言葉が少なくなっていく。
「うッ……クレオお♥アタシもうイキそうになってる♥」
「えぇッ♥　私もイキそうですわ♥この洞窟に入ったのはアリシアとこうなるためで――」
「……？」
「……？」

「んおぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!?」
「うおぉおおおおイグッ♥♥♥♥♥♥頭ン中からイックうううッ♥♥」


ビクンッ
ドクッ

ふたりが何かを思い出しかけた瞬間、
頭の中に鋭い閃光が走り、快楽が突き抜けた。
「はぁぁぁぁッ何これッ♥
これがチンポの射精ッ♥
ぐひッ気持ちイイいい♥」
「おっひいいッ♥
身も心もイキ……ッ♥
イッてますわぁぁッ♥♥」
催眠が解けそうになると発動する恐怖の罠。
アリシアとクレオはその圧倒的な快楽に屈し、
掛けられている洗脳の度合いを自ら引き上げる。
それにより、解除できない程の強化催眠が
施されることも知らずに――。


おびただしい量の精液を吐き出したアリシア、
そして子宮に打ち付けられる度に達したクレオ。
ふたりはやがて息も絶え絶えになりつつ、
しかしはっきりとした思考で確認し合った。
「はぁ……はぁ……気持ち良かった……♥」
「えぇ……ふふ……こんなに快楽を感じたのは
初めてです――これもすべて……♥」
「魔女ジルベール様のおかげ……♥」
「そうですわ♥　私たちをこの洞窟に導いて
くださった……あのお方の素晴らしい力♥」
アリシアとクレオを誘い、洞窟へ入れた魔女。
その場にいるはずのない存在を、ふたりは
言葉少なに讃え、その認識を共有していた。
「会いに行かなくちゃ――」
「はい……♥」
何も考えなくても浮かぶ、次に取るべき行動。
ふたりは息を乱したまま、隠し部屋を出る。
自身が洗脳し、殺し合いをさせた魔物の
死体だらけの第二層を抜ける。
目的の場所は、その先にあると知っていたかの
ような軽い足取りで――……。

Chapter 4
魔女の僕(しもべ)
-Witch's servant-

隠し部屋の鍵を使い、洞窟の奥地へと続く道が開く。
そこは魔力の淡い光が満ちた、不思議な空間であった。
魔物や生物の気配すらない、洞窟の主のみがそこに
存在することを許されるような、息の詰まる場所だ。

「……」

「――」

アリシア、クレオは何かに導かれるように、
その薄暗い道を歩いていく。

【その場所】に至る前に、己のすべてを曝け出すように
操られるまま身に付けた衣装をすべて脱ぎ捨て、
しかし瞳にはしっかりとした意思を宿したまま……。

「あ……ッ❤」

「――❤」

やがて見えて来た、洞窟の主――。

魔女ジルベールの姿に、ふたりは恍惚とした息を漏らす。

「ようこそ、主の間……この魔女ジルベールの空間へ❤」

深部を照らす青い光ではない、
魔女自身が放つ魔力の濃い紫色の発光に
吸い寄せられるように、アリシアとクレオは
王座の前に立つ。

「ここまで来たルーキーは
久しぶりよ❤　みんな
逃げ出しちゃうか、催眠に
耐えられなくて死ぬか……❤
アナタたちを選んで正解
だったわ――❤」

大股開きで座り、
妖艶に微笑む魔女。
これまで幾人もの
冒険者に眼を付け、
そして洞窟へ誘い、
命のやり取りを愉しむ
かのような発言……。

「ここまで来たご褒美を
あげるわ❤　さぁ来て、
アリシア、クレオ……❤」

魔女の危険な誘いに
黙っていたふたりは、
意を決してジルベールの
足元に行き――。

「申し訳ありませんでしたッ!!!」
バッ

ふたり掛かりで戦えば結果は分からないはずの魔女に対し、アリシアとクレオは額を地に着け、怯え混じりの震えを見せ服従の姿勢を取る。哀れにも命乞いをするかのような土下座の姿に、魔女は微笑んだ。
「あらあら、まだ何もしていないのに♥そんな無防備な体勢を取られると、私もビックリしちゃう♥ねぇ、どうしてそんな恰好をしているのかしら……？」
無論、ジルベールにはすべてが手に取るように分かっている。
「はッ!!!」
「はッ!!!」
しかし、この魔女は敢えて自らの口で喋らせることで、仕掛けた罠が完璧かどうか見極める狡猾さも備えていた。

「あッ……アタシたちは……このダンジョンに入った時からずっと催眠が掛かっていました……魔女ジルベール様の偉大な魔力が宿ったランタンに火を灯した時からです!!」
「催眠によって肉体の力と本当の自分が目覚め、もッ、元の自分に戻ることなんて考えられなくなりましたッ!!魔女ジルベール様のおかげで今の私たちがありますッ!!」
「スピリットに憑依され、チンポも生えました!!」
「私は角と尻尾が生えましたッ!!」
「素晴らしい肉体にしてくださったジルベール様に感謝すると共に♥」
「生涯の忠誠をジルベール様に誓いますッ!!!道具として仕えさせて頂くお許しを……ッ♥」

「ふぅん、そうだったの……♥
それでここに来る鍵を見つける時に
ガマンできなくてハメまくってたのね♥」
「うッ……♥」
「お許しくださいッ♥
アリシアを誘惑したのは私で……♥」
「クレオを罰するなら、アタシも……♥」
魔女にとって、洞窟内のことをすべて
把握するなど造作もないことだ。
圧倒的な実力差に、ふたりは叱責も
覚悟していた。
「ふふ、いいわ……♥
合格よ……それでこそ私に相応しい♥」
「よろしい――アリシア、クレオ♥
アナタたちの、生涯の忠誠を認めましょう♥
魔女の僕としてすべてを捧げ、仕えることを
許可します……さぁ、私の許へ来なさい♥」
「は……はいッ♥」

「アタシはこちらに
ご奉仕させて頂きます……♥」
「私は、この御足を……♥」

ジルベールに促され、その神秘的な肉体へ奉仕するふたり。
仕えるべき主に許可を得て、その快楽の一端になれるという
心の充足……アリシアもクレオも、これ以上ないほど
満たされ、そして後戻りできないほど毒が回る――。
「あぁ、んっちゅ……ジルベール様のおマンコ……♥」
「ジルベール様のすべてが魅力的ですわ……♥」
「魔女の体液を吸い取りなさい♥
やがてアナタたちも相応しい肉体になる♥
んッ……私も久しぶりに興奮して来たわ……♥」
頬を染め、汗を浮かび上がらせる魔女。
「好いオモチャが手に入ったわね♥
大事に遊んであげる――♥
うふふ……ははははッ♥♥♥♥♥」

魔女の歓喜に応えるように、僕たちの奉仕は熱を帯びる。
ヒトならざるモノしか存在しないはずの洞窟から
少女の喘ぎ声が聞こえるようになり始め、
やがて――それも聞こえないようになった……。

Epilogue
魔となりて
-Become a demon-

一週間後――。

新大陸の開拓に湧く街の酒場で、ある噂が流れていた。

「入ってはいけない洞窟」の話だ。

その洞窟は、入ると精神に異常をきたし、
中に潜んでいる魔物によって食べられてしまうという。

一見、恐ろしさとは無縁の初心者向けのダンジョンのような印象を受けるが、その中には恐怖が巣食っているという噂が流れていた――。

（果たして、本当にそうなのだろうか？）

冒険者ギルドに入りたての若い男が、止められたにも関わらず、そのダンジョンの入り口の前に立っていた。

彼は魔物の調査をし、危険度を広め少しでも冒険者の生存率を上げるために働いていた。

紅い月が照らす夜、彼はひとり洞窟に足を踏み入れる。

間もなく原因不明の眠気が襲って来て、意識を失ってしまうのだった……。

「……ッ!?」

洞窟に入ったはずの男が、冷たい石の温度に目を覚ます。

「こッ、ここは……？　あの洞窟の中なのか……？」

夜、誰もいないのを見計らって入った洞窟。
空気の重さからして、かなり内部に入っているようだ。
しかし、男はそんなところまで歩いた記憶がない。

何者かによって連れ去られた――――。

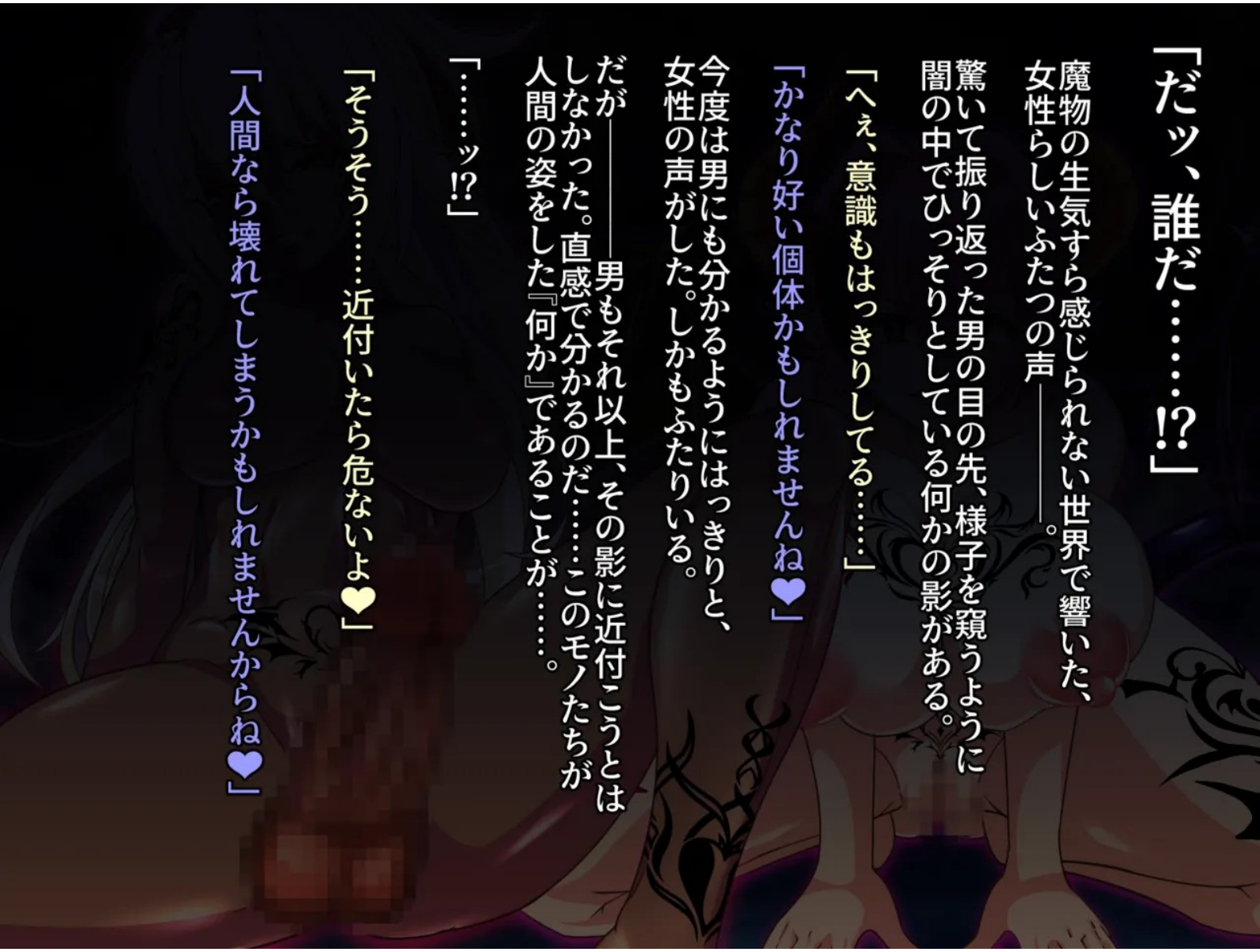
そう考えた男は、ゆっくりと確認するように
目覚めた地点から歩き始めることにした。

「これは――――ものすごい金銀財宝だ!!!」

しばらく歩いて見つけたのは……まばゆい光を放つ
金貨の山。それだけではない、一都市の財政など数十年は
持つであろうと言われる、伝説の魔具やお宝がひしめく
ように置かれた圧巻の様だった。

「――――ふぅん、起きてここまで来られる
人間がいるなんてね……♥」

「えぇ、驚きました……♥
ごく稀に私たちのように、強い意志と肉体があると
そうなるようです――――♥」


「だッ、誰だ……!?」
魔物の生気すら感じられない世界で響いた、女性らしいふたつの声――。
驚いて振り返った男の目の先、様子を窺うように闇の中でひっそりとしている何かの影がある。
「へぇ、意識もはっきりしてる……」
「かなり好い個体かもしれませんね❤」
今度は男にも分かるようにはっきりと、女性の声がした。しかもふたりいる。
だが――男もそれ以上、その影に近付こうとはしなかった。直感で分かるのだ……このモノたちが人間の姿をした『何か』であることが……。
「……ッ!?」
「そうそう……近付いたら危ないよ❤」
「人間なら壊れてしまうかもしれませんからね❤」

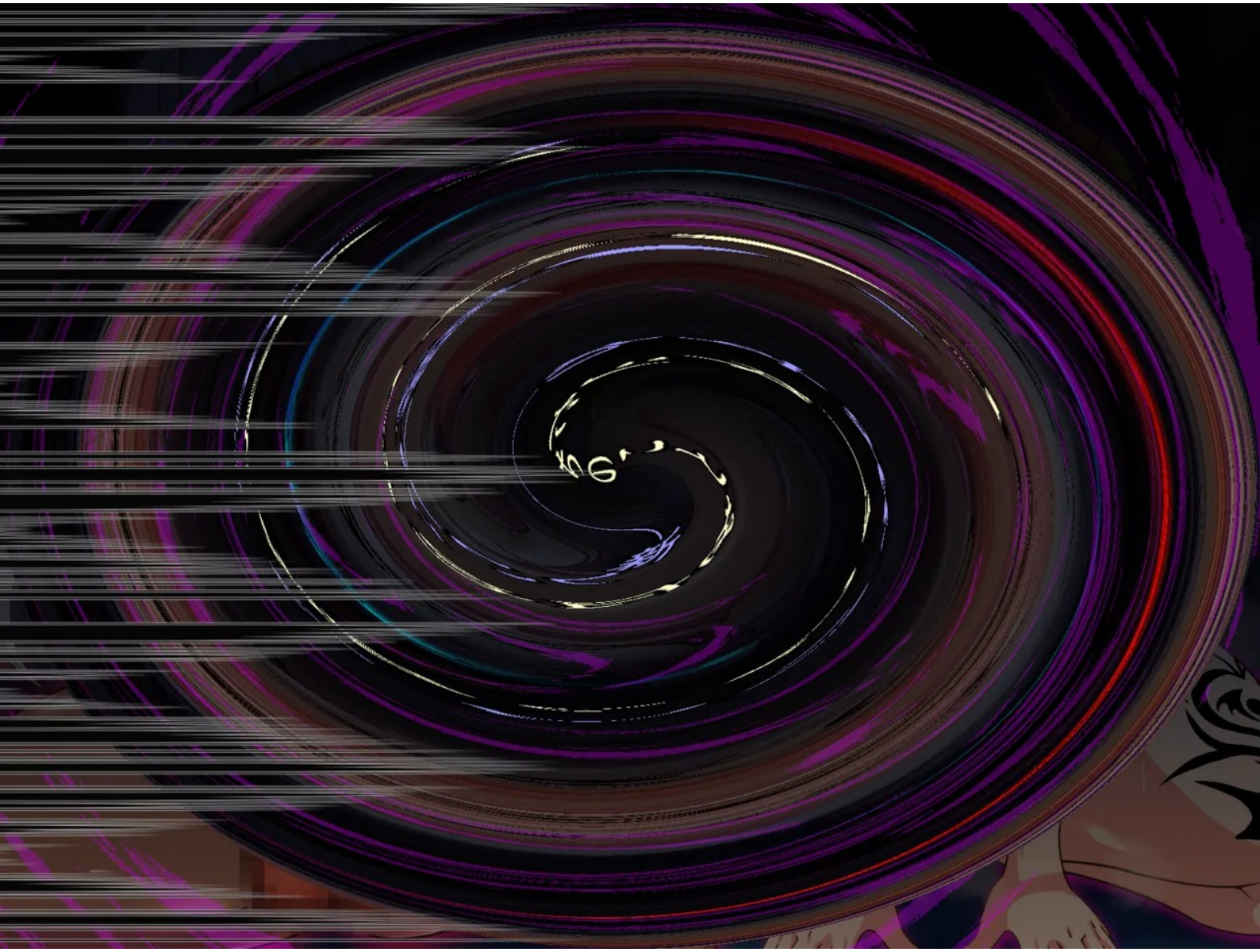
「私たち……♥」
「淫魔だからね……♥」

「……ッ!?」
男は絶句していた。
ロイアーナの魔物を記した図鑑にもその姿が定かではないと記録されている淫魔――サキュバスが、ふたりも目の前にいるのだ。角が生え、翼を有し、尻尾が生えている乳房の大きい少女と、ほとんど白い金髪に褐色が映える少女。元は人間らしいが、その肉体に起こっている変化はまさしく魔力によるモノ――本当の、本物の淫魔だ。
「ほ、本物の淫魔……ッ!!」

「はぁ、はぁ……も、もう食べていいですかアリシア？私、ガマンができませんの❤」
「クレオったら❤元シスターとは思えないよね……アタシはオスでもメスでも喰えるからいいけど……❤」
褐色の淫魔が有する男根はビキビキとそそり立っており、淫魔の血が止め処なく通っていることを示している。
「……」
男は命の覚悟をしたが――何かを考えるように褐色の淫魔が思案していた。

「この男、どうやら淫魔のことを知っているみたいだ……。こいつにアタシたちのことを広めさせて、ここにもっと人間が来るように仕向けよう――♥」
「おッ♥　おあずけですの♥　はッ♥　はッ♥」
意外にも、アリシアと呼ばれた淫魔は男を逃がすような発言をした。大きな乳房を揺らし、舌にまで記された淫紋を見せつけ、クレオという淫魔は涎を垂らしていたが……。
「に、逃がしてくれるのか……？」
男の問いに、クレオより上位にあるのであろうアリシアが頷いた。男の装いから、調査の類が得意と見抜いたのだろう。
「いいよ……ただし、アタシたちのことは詳しく広めてもらう――冒険者の心を煽るように……ね♥」

「頑張ってアタシたちのことを広めてね♥」
「待っていますわ――新しい人間(エサ)♥」



冒険者が集う街、マイルベル――。
ここの酒場には情報が集まり、冒険者ギルドからの依頼も舞い込む、駆け出しにとって最適の場所である。
「ここがマイルベルの街かぁ……」
開拓船に乗り、一攫千金を夢見て旅をする冒険者。
彼がこの街に足を踏み入れた時、思わず口にした言葉だ。
ヒトが、モノが行き交い、活気に溢れている。
ここならば、腕試しを兼ねて納得のいく依頼や報酬にありつけそうだ。
「情報収集は酒場が鉄則！
そろそろ陽も暮れて来るだろうし、酒場に行ってみよう」
新米冒険者の青年は酒場に着くと、手配書が貼られている掲示板が気になっていた。
「どれどれ――おや、何だこれは……？」

WANTED
WANTED
「……淫魔……？
ダンジョンに潜む魔物……？」
Φορ χριμεσ οφ μυρδερ, χονσπιραχψ, ραχκετεερινγ,
δεσχτρυχτιον οφ προπερτψ, γενοχιδε, τηεφτη,
ανδ οτηερ ιλλεγαλ αχτιωιτιεσ.
Βψ τηε ορδερ οφ τηε κινγ, εξεχυτε ον σιγητ.
Ρεωαρδ: Ǝ1,000,000 γολδ.

WANTED
WANTED
「あら、アナタ冒険者さん？
ちょうどよかったわ
ぜひ依頼したいことがあるの」

終

あとがき

この度はサークルPLUTOの作品「ヒュプノダンジョン-催眠迷宮-」を
手に取って頂きましてありがとうございました。

久しぶりのCG集だったのでどうやって作っていたか探りながらの
製作でしたが、以前作っていた頃と比べるとゲームや同人誌を
作った経験値があったのでかなりいろんなことができるように
なっていたと思います。

世界観としては自分が手掛けたロイアーナサーガのひとつ、
ということになっています。女神が去った世界はそれはもう、
欲望・野望渦巻く群雄割拠の世界になっていることでしょう。
魔女が台頭し始めるような話を作りたかったので、満足でした。

非常に広げやすい世界観、またキャラクターや世代だと思うので、
また時間がある時などにアイディアを練ろうと企んでいます。

それでは、また逢う日まで〈(_ _)〉

サークルPLUTO◆不動心
2021年5月吉日

奥付

■発行日：令和3年　2021年5月吉日

■発行者：PLUTO／不動心

■ホームページ⇩
https://arcana-pluto.com/
Pixivid：3767622
Twitter：hudo_shin

無断転載や違法アップロードを
固く禁止致します。